

『ちりりんぽりりんこがねの花』

(福島県大沼郡三島町の民話)

千葉大学日本文化研究会
民話分科会編

本書は、一九七九年（昭和五四年）十一月一日に発行された手書き謄写版刷りの民俗調査報告書「ちりりんぽりりんこがねの花」（福島県大沼郡三島町の民話）をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたっては、明らかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使い分け、および句読点の位置の変更等をおこなっています。また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、住居表示・地名などは、調査当時のままで表記しています。

なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

はじめに

眼前に広がっているのは、ただ果てしなく続く純粹な闇の世界でした。遠い山なみも、近くの樹木も、そしてさまざまな獣たちや妖怪までも包みこんでしまう闇。その闇の中から突然、車のヘッドライトに照らし出された一匹の小動物。狐だろうか、兎だろうか、一瞬こちらを向いてその目を光らせたかと思うと、飛ぶように私たちの前を横ぎって、林の中へ隠れてしまいました。そのとき、これが昔話をはぐくんできた世界なのだ。底知れぬ恐怖も、静かな安らぎも、無限の空想も、みなこの闇から湧きあがってきたに違いない。ふとそんなことを思いました。三島町の最奥地、志津倉山の麓、戸数わずか四軒の入間方部落を訪れた帰りのできごとです。

それほど遠くない昔、私たちの生活はこの闇の中にありました。人々は体を寄せ合うようにして囲炉裏を囲み、昔話に一時の安らぎを得たことでしょう。しかし、闇は私た

ちの生活から次々と追放され、それと同時に昔話もその姿を消していきました。そんな消え去り行こうとする昔話を追って、私たちはこの三島町にやってきました。夏の灼熱の太陽の下、あるいは激しい雷雨の中、会員たちが村のお年寄りのいる家を一軒一軒訪ねて集めたのが、この『ちりりんぽりりんこがねの花』です。

語り手と聞き手がいて、はじめて成立する昔語り。そこには、都会では忘れてしまった、人と人との素朴な心の触れ合いがあるように思えます。私たちに大切なものを思い出させてくれた昔話。そんな素晴らしい昔話の数々を聞かせていただいた私たちは、実に幸せであったと思います。

この昔話をいつまでも語りついでほしい。これは決して私たちの身がってな願望だとは思えません。しかし、それには私たちひとりひとりが努力しなければならぬ時代になってしまったのかもしれない。この民話集を手にした人が、昔話に受けつがれてきた日本人の心や民話の魅力について、もう一度考え直していただければ幸いです。

最後に、調査にあたって私たちをあたたく迎えてくれた三島町のみなさんに、心からお礼を申し上げるとともに、この民話集をお贈りしたいと思います。

一九七九年 秋

もくじ

はじめに	二	さるとかに	二四
三島町概観	七	古かめ	二五
三島町地図	八	花咲爺	二六
【昔話】		化け物の話	二七
瓜子姫	九	鬼むかし	二八
羽衣	一一	さるむかし②	三〇
信心の話	一二	疫病神	三二
盆花	一四	きつねとかわうそ	三二
二つまなこの話	一五	だんご殿	三三
おっぱの皮	一七	びわ法師と大蛇	三七
ほととぎす	一七	へび婿入り	三七
むかしの好きな殿様	一八	かさ地蔵	三八
さるむかし①	一九	やきめしかぶり	三九
五月の節句の話	二一	兄弟二人と山姥	四〇
		猿婿入り①	四一
		瓜姫	四三
		三枚のお札①	四五

三島町概観

三島町は、福島県の西南・大沼郡の中西部に位置し、海拔二四四メートルの農山村である。隣接町村とは山をもつて境界とし、東に柳津町、西に金山町、南に昭和村が接し、東西約十五キロ、南北三〇キロに延びている。

総面積の八四％は山林原野で、越後山脈より連なる千メートル級の志津倉山・高森山の高山がせまっている。また、町の北西部に只見川が流れ、大谷川・滝谷川が北流して合流する。その川に沿って標高二百〜五百メートルの平坦部や傾斜地に集落が点在している。

歴史的にみると、維新前は、幕府直轄領として御蔵入と称された。維新後、若松県に属し、十一ヶ村戸長役場がおかれ、町村制施行によって分離し幾多の変遷があったが、最後まで残ったのが西方・宮下二ヶ村で、これが合併して三島村となって後に町制を施行する。

昭和十六年、国鉄会津線が宮下まで開通し、同時に宮下発電所新設工事も開始され、電源開発と鉄道輸送による林業資源の開発により一躍脚光を浴びるところとなった。

しかし、この頃より逐次人口が減少し、過疎化の徴候が現れ、昭和三十六年、町制施行の頃より人口減少が激しさを加え、若年労働力の流出と出稼者が増加し、昭和四十六年四月に過疎町村の指定を受ける。町では過疎対策として、昭和四十五年に女性向きの、昭和四十八年には男性向きの工場を誘致し、人口の流出の歯止めをする。

昭和四十九年には自力開発により会員制による「ふるさと運動」を実施し、観光事業を展開している。

(人口)・・・三六八一人(昭和五十四年三月一日現在)

民話の収録

ここに収録した民話は、昭和五十四年七月に、福島県大沼郡三島町で採集したものです。

話は、「昔話」・「笑話」・「伝説」の三つに大別しました。また、長谷川民夫氏の記録による話を「民話その二」として、最後に掲載いたしました。

話はすべて村のみなさんから直接聞いたものをテープレコーダーで録音し、再びテープから文字になおしました。文字化は、できる限りテープに忠実に行了しましたが、多少手を加えて読み易くした箇所もあります。

断片的な話や重複する話、テープの不備のため文字化できなかつた話は、すべて巻末に話者名と共にその題名を掲げました。

【昔話】

瓜子姫

採話地区名
(西方)

じいさんは山さ柴切りに、ばあさんは山さ洗濯に行ったとき、川から瓜が流れてきた。大きな瓜だが、おじいさんと食べべと思つてきて、切つてみれば、中から女の子が出たつうだ。瓜から生まれたんだから、瓜子姫とつけべと思つて、そうして、じいさんとばあさんはかわいがつて育てているうちに、大きくなって、美女なんだが、あっちこつちから、

「なんといいい娘だ。俺さ嫁にほしい」

そうしてこんだは、年わけ(若い)えうちだから、あっちこつちから希望があつて、ある結婚の日に瓜子姫が、隣りに鬼ん婆がいて、その瓜子姫がかわいくとても食べたくて、そして今度は、いつもはた機など織つていたどもさ、その鬼ん婆がよ

うすを見に行くんだと食べてえと思つて、そうしたれば、おじいちゃんとはあさんが、

「隣に悪い鬼ん婆がいるんだから、お前など食われちゃうから、決して戸をあけてなんね」

と、こうして言つてたん。こんどは、

「瓜姫、俺に戸をあけてくんねえか」

おばんちゃとおじんちゃんは、あけんあけんと言うんだが、

「よくよくこのくれ(くわい)でいいから、戸をあけてくれ」

と申すで、こればかあ、あけてもよかんべと思つて、ちよつと、

「いまちいとあけてくんねえか」

三本指入るくれ、五本指入るくれ、しまいにはあけたれば、からつと入つて、とちちめて食つちまうだ。瓜姫の着物をば、鬼ん婆が着て機織つてるとこだ。

何だか機がパタンパタンといわねえけど、いやな音するなと思つたけど、まさか瓜姫食われちゃうと思わねえから、

いつもの通りよくよく化けていた。今度は嫁になったとき、行く途中、木の上で、

「瓜姫のかごさ、あまのじゃくが乗つてた」

と、こう言つたんだ。

「はて、おかしな事言うな。何だべとうちゃん」

三回くりけえす。

「瓜姫のかごさ、あまのじゃくが乗つてた」

て三回も言つた。これはと思つて気づいてかご見たれば、その瓜姫がこんどは、ひよいと飛んで、一目散に山さ逃げで行つちまつたつ。そんで、じいさんとばあさんはがっかりする。結婚式もお流れになる。そんなことあつたんだと。

羽衣

(西方)

お姫さんが天から降りてきた。寂しい顔して、はだかで。

そこを炭焼きじいさんが通りかかって、羽衣をその人が持つて行っちゃったと。

「泊まれ」

なんて泊めちゃっただと。

「おまえの着物はあつから、はだかではいらんねえから、俺がち一晚泊れ」

と言っているうちに今度は、嫁みたいになっちゃって、子めらできちまうの。太郎という子めらができたの。そうしているうちに太郎にしゃべっただと。

「太郎、太郎、元はな、おめえのかあちゃんは天からきたお姫様でやったんだが、着物ぬすんできて、これは絶対みせんなよ。もし見せるつつうと天さのぼられっちゃうから、決して教えてなんねえぞ」

て、まさか息子だから教えまいと思って言っただと、油断

して。何年もたつて、そうしたれば今度は、

「かあさまは、天さ行きてえだけど行げねえよね」
て口説いたれば、

「とうちゃん、そんな事言つてたから俺わかつてる」
て出してきて、子めら連れて登られっちゃったんだと。おやじ炭焼き行つてきたれば、子めらもいねえ、かかもいなくて、

「なんつうわけだ」

と思つて、何ぼ泣いてもわめいてもしようねえ、行がれっちゃった。そうしているちにある人が、

「何とかという木を植えろと、天までもとどくような大木がある」

てどっかから聞いてきた。その種まいて、木がでかくなつて、そこさ登つて伝わつて、天まで行つただと。

ところが、ちいっと雲の切れ目に一間ばかりとどかねえだと。

「ここまで登つて残念だなあ」

と書いて、

「ほんに困った。ここまできてまあ残念だ」

と書いているうちに、なんだかいぐとかそれを伝わってひよいとあがったれば、そこに太郎がいたっけだと。太郎がいて、

「お父ちゃんきた。お父ちゃんきたぞ」

と喜んでな。瓜畑みたいのを作っていたと。

「お父さん、この瓜は食べっとだめだよ」

て言ったと。

「そうか、こんなうまそうな瓜、食べて悪いなんてあんめえ」

と書いて食べたれば、そこから雲がわいて、ズズツと下さ落ちちまっただと。

「^(だから)したから食うなって言ったのに、父ちゃんは食っちまったから下さ落ちちまった」

信心の話

(西方)

金は持っていたけども、何の子めらもいねえ、楽しみねえなあほんに。ある人が、

「じいさま、信心した方がいいぞ」

て言ったと。じいさま、学問がなかったから、

「信心して何だ。どこかにか売ってるのか」

て言ったと。

「いやあ、そこらさ行くつうと売ってる。行ってみらっしやい」

「そうか。買ってくんべ」

と、じいさまとばあさま、信心買いに行ったと。

ある店入ったら、

「そんな信心なんて、俺知らねえ。俺が店さねえな」

と正直な人は言ったと。あるもの好きな人が、

「ほんにばあさまたち、信心俺が売ってやんべ」

て、冗談半分に、

「俺に信心あつから、買ってがっしやい」

て言ったと。

「どんなものだと思つたつて、他に形ほかのあるもじゃねえだ。それ信心で、たとえば、じいさまばあさまをこういうふうに、お題目などお経など色々となえ事など、年とつてなかなかめんどうだべから、信心てばな、だいたいこんな事だ。じいさまは、『立つた、立つた』とでも言わっしやい。誰でもできることだべ」

『立つた』ぐらいできるは。それが信心か』
て言えば、

「それが信心だ。ばあさまは、『しやくがんだ、しやくがんだ』て、仏様の前さ行つておがまっしやい」
と言つただと。

「あら、それ信心か。いい事聞いた。じいさま、晩げから信心やんべ」

ばあさまとじいさまは、

「これ信心か。ほんでは雑作ねえ。俺は、『立つた、立つ

た、立つた』

て、まんま食つておがんでたと。そうしたと思つたらばあさまが、

「しやくがんだ、しやくがんだ」
て言つてただと。そこさな泥棒が来ただと。立つて、

「誰だんべ」
と見たら、

「立つた、立つた、立つた」
て言つてると。

「はて、俺は見つかれちゃつたべ」
こうしやくがんだと。ばあさま、

「しやくがんだ。しやくがんだ」
て、ちようどあてはまつてやんの。

「はあ、とてもこんでは大変だ。俺は入るべと思つたが、気持ち悪くて入りたくねえ」

て逃げちまつた。

信心したために盗難をのがれちまつた。

盆花

(西方)

むかし、和尚様が、

「小僧、小僧、盆花でも取ってこ」と言っただと。

「はい」

山の奥さ入って、いい花取ってくべと思って、どんどんと山の中さ入っただと。そうしているうちに真暗になっちまって、来るにきられなくて困っていたと。そのとき、山のも(向こう)こうの方に灯りが見えつから、あそこに誰かしゃいるなと思って、その所をたよって行ったと。泊めてらうべと思って。

「こんばんは」

「はい」

なんか恐ろしいような声だけんども、まさか外へのいらんめえと違って、

「今晚一晩泊めてくらんしよ。俺が道にまちがって来まし

た。盆花取りに来て」

一部始終。

「ああ、泊まれ、泊まれ」

て言うんだと。泊まって、

「これでも食え」

よかったと思っただけど、何だか恐ろしいようなばあさまで、

「木、なくなって寒かんべから、木とつてくるから、俺が寝床見てなんねえぞ」

と言っていたと。木とりに山ん中さ、真暗になつて、見んたつうから、なんだか見たくなくなつちまつたと、どんなものかと。戸あけて見たれば、頭の毛からがいこつ骸骨から、いっぺえ山のようにつまっているだと、寝床の中さ。

「これはおつかねえ。俺も夜中に食われちまう」

と違って、とてもここにはいらねは。そうすると、鬼婆が来ただと。逃げるに逃げられなくて、

「俺さ、便所さ行けねえから」

ちよつと機転きかせたと。ひぼく(ひも)つつけたと。逃げちまつては大変、長えつなつけて。

「小僧、小僧まだか」

「ま〜だで〜す」

しばらく、

「なんしよ長えなあ」

しまいに神様が助けて、ひぼつけてトイレの窓から出してくれた。真暗え所逃げて行つたと。そうしたれば神様が、

「まだで〜す」

「長えなあ。そんなに待っちゃいらんねえ」

戸あけたれば、いねえだと。

「どこさ行かれちやつたの、小僧、食うべ」

と思つたの。

とにかく追っかけたれば、よっぽど本気になつて無我夢中で逃げて行つたれば、だんだんと明るくなつただと。魔物は行げねえから、

「あ〜あ、悔しい」

と思つて戻つた。小僧がお寺さ歸つたけど、

「いやあ、ひでえめにあつてきた」

小僧様が一部始終語つて聞かせた。

二つまなこの話

(西方)

むかし、三つまなこの人と、二つまなこの人と、一つまなこの兄弟いたと。鬼婆おにばばが人間は二つ目であつからめんこくねえだと。化け物の鬼婆であつたから、一つここに持つたがんと三つ持つたんがのがかわいくて、人間のこと虐待するの。ばあさまと兄弟二人で。

「こんなんがな、俺達に似ねえ。こんなめんこくねえ」

でどこかさやつちまうんだな。人間が親達に勘当されちまつたみてえになつて、山ん中にこうして見てみたけど、食うには食わんねえし困つたな、と思つたれば、神様みて

えな人が犬を、

「これは何ごともおめえのためになるものをくれっから、腹減ったときは、『ちんちんころりんまま持つてこい、お魚なんでも持つてこい』て言うて、まんま二度二度持つてくるし、何だつて運んでくれっから、これを大事育てて、これと生活してろ」
て言っただと。

「どんな生活してるか、死んでんだか生きてんだか見てこ
化け物三つまなこに言ったと。

「生きてた」
て言うだと。

「不思議だ。あんない(何日)つかも生きてるはずねえだ」

ある日、一つまなこがいるうちは、『ちんちんころころ』
なんて言わねえでいただと。『ちんちんころころ』なんて言
うと、犬殺されちまうと大変だと思つて、一つまなこ眠っ
ちまっただと。

「何にもいなかった」

「三つまなこ行つてこ」

したれば二つまなこ眠つてた。だけど一つまなこあいて
ただと。しめえに腹減つて、『ちんちんころころ』言つただ
と。一つまなこは見えっから、

「何だ、犬いたんだと」

「この犬、ふとどきな。殺してこい」

て殺されちまうだと。殺されちまうて困つたんだ。

「こんどは、『ちんちんころころ』言つたつて、まま持つ
て来ねえし、いやあ、ひでえ。どこまでも困つた」

て、それをていねいに埋めて、花などたてているうちに、
そこさいたした花が咲いたと思つたら、金のなる木みてえ
になつたと。それをとつて、蒲団ふとんさしいていただと。どこ
までも殺すべと思つたつて、助けられて人間は生きられた。

おっぱの皮

(西方)

むかし、ある所にとてもいい女子が、他さ行がなんねえとき、

「とてもおめえみてな美人がそこら通るつうと、そこらの海賊ども鬼どもいっから、おつつかめられてしまうぞ」

て、うば皮っていう皮を被かぶつていけば、無難に通られる。よくよくしなび(しなびたような顔)づらした百たればあみてえのがの、誰かにもらつて被かぶつたれば、

「ばばあ、入ってくんない」

て無難に通った。美人でそのまま通れば海賊におつつかまれちまうつて、うば皮を被かぶつたために無難に通った。それが行つて、下働きをしているうちに、美人が夜になると本気になって勉強してるんだと。それを庄屋様の息子が、

「なんだ、十時にも、十一時にもなつて、灯りさ使つて何やつてんだべ。あのうばは、ほんにあんなばあ様、勉強するはずねえ」

と思つて、こうしてのぞつて見たれば、うば皮など被つてねえで、勉強していただと。うば皮をとつて勉強していたから、たいした美人であつた。息子がしめえに恋わずれえみたえになつちまつてな。なんだべと医者にさんざれば、

「誰か好きな人いるんでねえか」

とさぐつたれば、このうば皮被かぶつた女子であつた。その家の下働きが嫁様になつた。

ほととぎす

(西方)

お寺の和尚様と小僧がいたんだと。この和尚様がぜいたくもので、小僧になど、ろくな物食わんねえで、ある日、小僧がな、

「和尚様、山芋取つてきましたぞ」

と、山芋のうめえところを食わつしやい、わわつくでなど

うまくねえ、固いのが食って、和尚様を大事にしていたんだけど、これも知らねえで、

「この野郎。俺にさえこんなうめえもんくれるんだから、野郎はどんなうめえもん食ってんだべな」

悪い考えで、腹引つつあばいてみましょ、と思つて、小僧の腹引つつあばいて中見ただと。したれば、よくよくまづい物ばつかし出たんだと。そうしたれば、そこさ、神様来たんだと。

「おめえは、ほととぎすになれ」

と言われて、一日のうち八千八声鳴かなければならねえ。

「ほどこけたか、ほどこけたか、ほととぎす」

むかしの好きな殿様

(西方)

ある日、人が行つて、

「お殿様に、むかし語つてくれましょ」

と思つて、猿かに合戦、桃太郎など百も語つて、しまいに種つきてしまつただと。

「とても俺、後は知らねえが」

「同じむかしはだめ。じゃ、おめえは好きな物くいやあねえど」

と、おみつ(除外され)とされつちまうと。ある機転のきいた人が、

「ほんじゃ、よつばら(鮑)になるほど語りましょ」

と語つて聞かせたと。そうしたれば、やっぱり、へびの話など、いなごの話など語つて聞かせた。

「あゝ。よつばらやめろ」

と殿様が言つたと。

「好きなのくんで」

て言つたら、

「好きなのくれっから申し出る」

したれば、何だか風呂敷一つもって、きんきん引つつあばいていたけど、風呂敷をほーほー引つつあばいて、はじさきたらまた別な方。

「この野郎。風呂敷など引つつあばいてやがる」

何すっかと思つたら、それがの、糸みたいにつないで、しめえに、米蔵の十俵も二十俵もある米蔵のへーどの中ぐるつと。

「この中の物みなくんて」

と言われつつちまって、米倉庫はもらつちまっただと。

さるむかし ①

(西方)

ある農家のおつつあまが、女子三人持っていた。ある日、田んぼさ水かけに行つただと。そのちようどせきにた

だ水かけるとこさ、大きい石があつて邪魔になつて、水かかんないんだと。おしてみてもなかなか力がなくて、

「この石、誰かほんにとつてくれる人あつたらば、俺、娘三人いるど、どうにも一人くれるがなあ」

と一人言しやべつただと。そうしたれば、さるがどつからか聞きつけたか、その石かたづけちまつただと。本人は、

「娘もらえばいいんから」と言つただと。

「さるのかかになど、俺の娘三人いたんけどいぐんだんてか。困つたなあ。俺ほんに。大事してあんな事言つたなあ」

と思つて、よくよく心配して寝てしまつたと。そうしたられば一番大きい娘が、

「なんだ、おとつあん。まんま食わつしやい。寝てばっかしいないで」

「いやあ。とてもまんまも食いたくねえ。俺が言うことを聞いてくんねえか」

「どんなことだ」

「俺、さるにかかってくれるよう、水かけに行つて決めただ」
「なんぼなんだつて、さるのかかになんてなんでやな。や
まかしい」
なんて言われちまっただと。

「ああ、いま二人言うこと聞かれねえときは、俺なじよう
すべえ」

と、また寝ていただ。二番目の娘が、

「ああ、毎日寝てばかりいて、まんまも食わねえで、食わ
つしやえ」

「俺が言うこと聞いてくれねえか」

「どんなことだ」

と、またその話語つただと。さるのかかになつてくれと。

「やかましい」

と言われちまっただと。

「はて、今一人の花子という娘、これにいやと言われたら、
さるにしめ殺されちまうなあ」

と思つて、ますます弱つたと。こういうわけだと。花子と

いう娘、

「おとつあん、まんま食わつしやい」

「俺の言うこと聞いてくんねえか」

と言つたれば、

「どんなことだ」

「さるのかかになつてくんねえか」

「いやあ、なんぼいっとくだ」

とこうきたつちやと。

「はあ、よかつた」

と起きちまつてな。

「おとつあま、俺が頼みがある。あのふくべの中さ、針

千本買つてくんろ」

と言つたと。

「はあ、そんなの買つてくれるわ」

と千本も買つて、そして山奥さ、嫁に行つてきただ。花子
がなあ。三月の節句に来るときに、つづみがあつただと。
その上に桜が満開に咲いていた。

「はあ、きれいな花だ。俺がのじいさん、一枝持って仏様さあげたれば喜ぶが、一枝取って来てくれねえか」と、さるにお花さん言っただと。

「わけねえわい」

それからさるがうすま^(目)までしよって来たど、ふたして。

「うす、降ろすかな」

「俺いのじいさまは、土さおっつけるともち、土くせえとなんていうが、うすしよって上がってくる」

と言うたが、うす持って、てこてこ登って、

「こころへんかな」

「いまつと先。いまつと先」

よくよく細えとこまで上げちまって、しまいにぱつと裂けちまって、池ん中じゃばくんとうすとともに落ちちまって、死んじまったと。

「さるさわへ、落ちる命は惜しくない。あとにお花が泣つきゃんべえ〜。泣つきゃんべえ〜」

娘は、一人つこで来たんだと。

「に^(おまえ)しはよくまあ、一人で来たのか。さるはどうした」

「さるは池ん中入って死んじまった」

じいさんもそれから喜んで、機転のきいたいい娘で、親孝行なんだが、ともしあわせに一番しあわせに過^(こ)した。

五月の節句の話

(西方)

昔、山奥に一軒家があつて、そこにとつあまみてえな人が住んでいたが、

「二人では何かにと不自由でとても。ま^(ごはん)まなど食わねえかかあ欲しいなあ」

今の世の中、何ぼ何だつて飯食わねえ嫁などあるめえと思つたんだが、一軒家だから、そんなこと願つてたの。美人の人が、

「私はままも食べませんから、よろしく」

なんて入りこんだと。とにかく俺も願ったりかなったりだ
と思つて、一緒に住まっこしているうちに、二日たつても
三日たつてもまんまがねえで、どさくさどさくさと働いて
いるだど。おかしな人もあるもんだど。不思議だと思つて、
「俺はちよつとよそさ行つてくつから、一人で留守居して
いてくれろ」

それで、よそさ行かねえで二階のところ様子見ただど。
これは女の人も他行つた頃だと思つて、いままで一人で、
「いっかもままもかねえかかなんてあるんでねえ」

こんな小言じいじい、釜水などひいて、とま入れるよう
な釜さ。そして今度は薪とつて、火ぼんぼんたくから、何
すつかと思つたら、今度は米といつてもいっぺえ、なんぼ炊
いたんだか、今度はその釜の中さ入つてまんま炊きしまつ
たど。それ、まんま炊いてできたら、どんなことすつかと
思っているうちに、その嫁様がな、焼き飯いくつもいくつ
も握つて、頭見たれば、こんな大蛇であつたんだど。大き
な大蛇、口ありてぼんぼんとご飯をたつたかみたかで一釜

みんな食つちまつたど。そこを見たば、おやじさま、

「やれやれ、これは大変だ。しめえに、俺まで食われつち
まう」

おつかなくつて知らんぷりして、何とかして二階から降
りて、知らねえふりして、

「おめえ、はあ悪いけど、どうか帰つてくろ」

こう言うだど。そこ見ちまつたから。見らつちやあんめえ
と思つたけど、どうして俺、こんな帰つてくんと、い
がねえわけにはいかないし、

「俺にも頼みごとある」

「なんだ」

と言つたら、

「こ(みそ)がになつてくんと」

「こがあるしになもあつから持つて行がっしやい」
と言つたれば、今度はしまいにおりみて、

「おこしてくんと」

手で起こすべと思つたら、手でぐいとこがさ入つちまつ

たと、とつつあまが。どんどんと山ん中さ、とつつあま中
さ入ってあがって行くんだと。そして途中、

「世の中に、考えてみたってわかんべ。ままがねえ嫁がど
こにあるべ」

ぐつぐつじいじい、山さ行ってとても人一人しよって
んだし、こがも大きいから、

「ああ、この坂で休みましょ」

と思つて、どかっこのかと一緒に腰を降ろした。

「あれ、この次は食われちまうな。困ったな、神様」

なんて信心などしたれば、とてもしよねえことだ。そう
したら、藤づるがたれていたと。こがのそばに。この藤で
も伝わって出てくれましようと思つて、やつと抜けだした
の。そうして抜けだして、とつつあま抜けたってことわか
んねえ。

どんどんと山の上さあがんだと。人一人出たから、軽い
ような気はしたんだべ。そして今度は、じっさま、今まで
来た道どんどん下がるんだと。今度はようし、人食つてく

れましようと思つて降ろしてみれば、

「これは逃がれちまった」

とつつあまがいねえんだと。出ちまったから逃がしてお
かれるもんかと思つて、本当の大蛇になつて、ダツタダー。
追っかけたら、はるか向こうの方に飛んでんだつて。とて
も間近くなつたら、食われちまったら困るなあと思つて、
しよぶ、よもぎの中へダダツと入ちまつたと。

「これは残念だ」

へびつていうのは、しよぶ嫌いだと。

「これは、くせえ、くせえ。とても中に入れねえ」

せつかく来たけど、しよぶん中へ入ったために、とつ
つあまは命びろいしたの。

「あら、これはへびよけに、しよぶつていうのはいいな
あ。また来ねえということもねえ」

と思つて、しよぶした切つてうちさ持つていつて、風呂
さたてたり、いいのは軒さなどさしたりしたれば、それか
らはへびが来なくなつた。

その日が、五月の五日であったと。

さるとかに

(西方)

さるとかにが、ある日、稲荷様みてえな所さ遊びに行つただと。そうしたれば、参りに行く途中、かには焼き飯拾つちまつただと。

「あれ、これは誰か落としたんだ」

さるは、柿の種一粒拾つただと。さるは賢いから、焼き飯食いたくて、かにかん(馬鹿にして)して、

「かに、かに、かにさん。その焼き飯と、この柿の種、取つかえべ」

と言つただと。

「これは柿の種、食べようもねえし、取つかたくね」と、なかなか承知しねえで、

「とっける、とっける、とっける」

と言うんで、

「とっかんべ」

ということになったと。

「どうすんの、この柿の種」

毎日水をくって、土の中埋めて、

「早く木になれ、柿の種。早く芽出さぬとちよん切るぞ」なんて、かにか毎日水くれしてるんだ。そして芽が出たんだと。

「ああ、芽が出た。よかった」

そして、何年かたつたら、柿の木に柿がいつぺえなつただと。そうしたれば、かにはなかなか柿の木に登れねえだ。何ぼうまそうな柿がなつても柿がもげねえから、隣のさるさんがいつも友達で、

「柿もいでくれねえか」

と頼んだら、さるが、からつからつ上がつて、もいだけはいが、まあうめえとは食つて、柿の渋いようなところは、

かにのときさ、ぶつつけたり、しめえに殺しちゃった。そこさ子ががきて、

「何だってこんなひでえめにされちゃった。さるのおかげで」

線香あげて泣いてるところだ。さるは感じねえさるだから、

「ようし、さる、敵^{かたき}取ってくれるしかねえ」

と、子がにがみんなに相談して、今度はさる討ちさ。栗がほ^(いろうの火)どの中に入れといたれば、さるが知らねえでそこさ来たれば、パアーンとはじけて、いや顔中やけどしちまった。

流しき行つて、早く冷やすべと思つたら、そこに蜂がいて、ポーツとさされちまった。あっちこっちからな。今度は痛い、痛いと思つて、逃げて行くべと思つたら、上の方からゴロゴロ降りてきたうすが、さるの上さ、パカツと落ちちまった。しめえに、死んじまった。

「子がに喜べ、敵^{かたき}が取れた」

古かめ

(西方)

あるお寺に、だんな様は好物ばかり好きで、かあ様は好物言つてると、十時でも十一時でも来るまで、夜なべして針仕事などしてつと。何だかちやくでんの方から、どすん、どすんときて、

「だんな、毎晩好物おさる。かかやしまつて寝らんねえ」としいしいするんだと、気味悪くて、

「何だって耳のせいでもねえ。おかしい」
と思つて、だんな様にこういうこと言つて歌、歌つてきたんだと。

「べらま、そんなこと本気にしられっか」

「何でもちやくでんの方から来た」

「ちやくでんの方から来たってほんとか」

つて、ちやくでんを見たれば、古かめに銭いっぱい入つていただと。それが出て、いつもでてきいきいしたと。

じいさまとばあさまが、犬かわいがってやってたつて。犬がある日、

「ここ掘れワンワン、ここ掘れワンワン」

つて、あんま吠えなければ、掘ってみれば黄金がざっくざっく出てきた。それでざっくざっくと出てきて、ガラガラつてあげたれば、隣のいじわるじいさんが住んでただと。

「何してそんな銭もうけた」

「犬が掘れ掘れつていうから掘ってみたれば」

「その犬、貸せ」

「貸さねえ」

貸せ貸せつて、むりやりひっぱつてつたれば、ここ掘れともいわねえのを掘ってみれば、かわらの欠けたののだの、一つ目小僧だの蛇などばっか出てきたと。おこつて犬ぶつ殺して、埋めちまつただと。殺しちまつたつていうから、どこさ埋めたつていうから、ここさ埋めたつていうから、

じいさま墓じるしに松の木うえた。

したれば、その松の木がずんずんずんにわかて育つて、何年もたないうちに大木になつちまつただと。

それで（その木で臼を作つて）臼をほつて、餅ついたれば、またそつから金がザクザクザクザクと出た。

そしてこんだ隣のじいさまが臼借り出した。臼借りてきたれば、どろ水なんと茶わんの欠けたのばっか出たと。いじわるじいさま、臼を割つて焚いちまつたと。焚いちまつたから、そのあくをもらつてきて、

「ちりりんぽりりん黄金の花」

つて、枯木（かれき）がみんな一面に花咲いただと。こんだ殿様が通りかかつて、

「花咲かじいつていうめずらしいじいさまがいるそうだから、花を咲かせてみる。枯木に花を咲かせるそうだから、咲かせてみる」

「ちりりんぽりりん黄金の花」

つてまいたら、ほんとにみごとに咲いただと。こんだ隣の

じいさま、それ聞いて、われも灰汁あくの残ったのをかき集めて、

「ちりりんぽりりん黄金の花」

ってやったけど、殿様の目ばかりかかって、ちよつとも花咲かねえで、やっぱりなんでも正直しねえとなあ。

化け物の話

(西方)

昔あったとなあ。あるところに、一人の旅人が、お坊さんが、旅にきて、そうしたら標識がかかってただと。そして、『化け物を退治した人には、その寺の坊さんになってもらえ』っていう標識が立っていただと。そき、一人の坊さんがきて、そして、

「そんなとこ、私が行ってみつか」

って、行ってみただと。そして、

「私が泊まってみつかから、まきと酒を用意してください」
って、その坊さんがゆって、そして村の人たちがまきやあれをして、そしてお坊さんが、火とんとんいろりにたいて、酒飲んでいたら、とてもきれいな音色ねいろがしただと。

「ああ、これは蜘蛛くもの化け物なんべやおめいは」
って言ったら、そのきれいな音色は消えただと。そしてこんどはまた、

「こんだはなんの化け物でてくんかなあ」
って、酒飲みながら、したらこんどは、

「ケタケタケタケタ」

って笑うような声がしただと。そしてこんどは、

「おめえは下駄げたの化け物だべわ」

って言ったら、その化け物はまた消えただと。そしてこんどは、

「カサカサカサカサ」

って音すんだと。

「おめえは傘かさの化け物なべわ」

って言ったたら、その音が聞こえなくなっただと。裏山さ逃げたのかななんだべな。そうしているうちに、夜が明けたから、鐘ならしただと。そしてその村中の人たちが、鐘なったから、あのお坊さん生きでたんだわって、みんな行ってみただと。

「何か変わったことないですか」
ってたら、

「変わったことあったがら、そこらんじゅうみんな捜してみろ」

ってゆったと。そしてら古いお寺のなか捜したら、二階のほうに古い蜘蛛のいでやっただと。そしてこんどは、縁の下には下駄の化け物いたりして、そのお寺さはこんだ化け物でなくなつて、その坊さんが住むようになっただと。

鬼むかし

(西方)

【録音テープ切れのため途中から】……………

「娘どれでも好きなのくれるが」

なんて、年寄りだがら、ひとり言いったと。そのうちにかみなりさまがなつてきて、

「さあ、なんていま、おめえ言った」

「なんも言わねえ」

「言わねぐねえ。言った」

「なんとも言わねえが、この田さ、水かけてくれつと、人いる娘のうち、どれでもくれるつてゆった」

「雨降らせたのおれだ」

こんだ、ひとりくつちえやるように決めただけんども、だれにも娘たちに話しかねかった。こんだじさま、娘に、鬼さ嫁にいげつてなかな言わんねえ。

「おげが水でも飲まねえか。食わねえか」
つて言うがら、

「飲みだくもねえ、食いだぐもねえ」

「死んでしまうから、なにか食べ」

「なんにもいらねえがら、鬼のとごさ嫁にいつてくれ」

「ああいやだ。鬼のとごさ嫁にいつてられっか」

さあ、じさま、一番目の娘にてきらったがら、こんだ

二番目のがきて、

「飲むが食うがしねえか」

つてゆうがら、

「飲みたぐも食いたぐもねえ。姉にははねつけられたけんども、ぬしや嫁にいつてくれ」

またそれも、

「鬼のとごさ嫁にいつてられっか」

つて、はねつけられた。こんだ三番目、みんなにはねつけられて、さあこんだもう、七人みな、そういうふうにはねつけられた。八人だがら、いまひとりほがいねえ。こんだなんといつても、飲みだぐも食いたぐもねえ。鬼のとごさ、つていつていうぐえいに（ああ、これひとりで、おれは死

ぬほがねえ。鬼にくわつちまうほがねえ）、

「なんでもおまえの言うこときぐが、じつはこうこうこういうわけで、話した姉たちみんないかねえつてゆう。嫁いつてくれ」

「行く。かわりに、けしの種三じよう買つてくれ」

けしの種、三じようはたいへんだ。それでこんだじさま、けしの種、さつそぐ買つて、そして用意した。そしてこんだ、鬼がカゴひとりでかついで、むげえ（むかえ）にきた。それから、

「このけしの花咲いだとき、けしの花たどりに来てくださいい。おれ来らんねえだがもしんねえから。来てください」

何年もたつたから、今年はけしの花咲いだがら、行つてみつかつて、けしの花たよりにぎつといつて、鬼の屋敷さちやんとついだ。それでじいさま、泊めらつて、何年もたつてから、子供大きくなつて、男の子だが。それで、娘とじさまは下さ寝で、鬼の親子は二階さ寝だど。それで夜中になつたら鬼が（じさま食いたい）つて、はしだんの上にいで、口から火ふいだだけど、子供に、

「おやじ、ばがなまねすんなよ」

ってゆわっては、まだしようがねえって思ってた鬼は寝て、
こんだ、子供寝たんべっておもってまだ、子供にやられた
だ。おやじはこんと寝てしまった。

・・・【続いているが、よく聞きとれず】

さるむかし②

(西方)

昔あるところになあ、じさまと娘一人がいたど。そして、
じさまが、田んぼに毎日水かげでくけんども、ながなが水
がおもうようにかがらないで、じさまが困っているところ
へ、一匹のお猿さんが出てきてな、そしてじさまに、

「じさま、じさま。水がかがらないなら、私がかげでやつ
から。おれが言うことを聞いてくれるならば、おれすぐに
水をたくさんかげでやるがらどうだ。おれの言うごとつつ

うのは、あんたのところには娘さんが一人いる。それを私の
か^{（妻）}があにくれてください」

こういわれで、じさまが、さで困ったこといわれるな、
とは思ったが、まずお猿さんのこんだがら、まさかと思っ
て、

「ああ、そんならよし、水をたくさんかげでくれたら、娘
をあんたにやるから、そんじゃこの田へ、たくさんの水を
かげでくれ」

そう約束して、そのお猿さんがこんだ、いっしょうけん
めい水をくんで、たちまちのうちにその田に、水をたくさ
んかげでくれた。そんでこんだ、じいさまが、（ああ、これ
は困った約束をしてしまった。まあ約束だから、いちよう
娘に聞かせないでしょうがない）と思って、うちへ帰って、
娘さんにその話をきいたら、そしたら、

「私、お嫁さんにいぐがらだいじょうぶだ」

そうして、お猿さんのもとへ、お嫁さんにいくことにし
て、お嫁入りして、そうして、お正月になったので、親元

へお礼にくるのに、もちをついて、おじいさんのところへもっていぐためにもちをついて、そうして、お礼にもつてくるもちだから、そのお猿さんがもちをついて、うすでいっしょうけんめいもちついて、そうして、別な板の上にごう丸くあれしようと思つたら、

「うちのじいちゃんは、ほかへあげると、そのにおいがしていやだつていうから、うすについたまま、それをもつていって、お礼にもつてくほかない」

そんで、お猿さんは、

「ああ、そんなら、こんなうすなんかわけねえ。うすいっしょにしょつて、ぼくしょつていぐがら」

つてゆうので、そのお猿さんがうすをしょつて、途中まで来たたら、途中に一本の桜の木が非常に満開に桜が咲いていて、

「ああ、なんてこの花きれいに咲いている。これ、うちのじいちゃんにもつてつてやつたら、なにほど喜ぶかしら」

どつて、そのお猿さんに言つたら、

「そんなじゃわけねえ。そんなじゃおれ、折つてくつから」

つて言うので、しよつたうすをそこへおごうと思つたら、

「いや、そこへおごど、土のにおいすつから、そのうすは、そのまましよつて、折つてもらいたい」

すつと、お猿さんが、

「ああ、そんなことわけねえ」

つてゆつて、そのうすしよつたまま、木の枝へあがつた。

「もつと(別)この枝がいい」とか、

「もつと上。もつと上」

つて、その娘さんがゆうので、上まであがつたら、木がぼきつと折れで、お猿さんはうすしよつたまま、下へぶちおちて、うすの下になつて、亡くなつてしまった。

そして、お猿さんが亡くなつたから、家へ無事に娘さんほもどつて、じさまはおおよろこびでいやつた。みんな娘さんも、親のいうこと聞かなくちやなんねえもんだがら、親のいうことはきけや。

ざつと昔、さげえ申した。

疫病神

(西方)

昔、川があつて、そこに渡し場があつた。どうしてかつてゆくと、向こうからこつちへ渡る人がいたわけ。その渡し場の渡し守が、

「おまえは何だ」

つて言ったら、

「わたしは、病気の神様だ」

と言った。そんだがら、

「渡してやれない。この村、病気になったらたいへんだから」

「んだ。おまえのうちだけ寄らないから、渡してくれ」

つてんで、

「うち、どうやってわかる」

「んなら、何かしるしのあるもの、そこへさげとけ」

「んだ。うちでかごさげとくから、かごさがつたうちが、うちだから、そんだ、うちへ寄らないでくれ」

そういうことになって、こんだ、全部のうちでかごさげるようになった。

きつねとかわうそ

(西方)

むかし、きつねというものはうそくだ。かわうそつていうのは正直だ。冬、きつねがかわうそのところへ魚食いに来た。かわうそは魚をとるのがじょうず。きつねがかわうそのこと、ばかにして、かわうその家さ行って、

「かわうそどん、どうした」

て言うつと、

「はあ、よく来た」

きつねに魚くって、毎日毎日ごつつおした。ある晩に、きつねが、

「俺ばかりごつつおうになっていらんねえから、うちにも来ろ」

かわうそが、いばってきつねの家に行ったところが、きつねはひとつのあいそもねえ。かわうそ、また行ったらば、

「なんだおめえは。天上さ、神様にようさあるからあいそらんねえ」

て、用たさなかった。きつねがかわうそに聞くの。

「かわうそどん、かわうそどん。どんな具合に魚とるんだ」
て聞いたれば、かわうそが、

「それはわけねえもんだ。朝げ早く川さ行って、氷をぶつかいて尻尾を川さい(いれておく)つちよくと、魚が集まってとれるんだ。やってみらっしゃい」

「それはいいもんだ」

と、きつねが朝早く行って、氷をぶつけして尻尾を

いっちょいた。尻尾がすみ(凍りついて)づいて、とれなくなってしまうた。尻尾抜けてしまつて、キャンキャンて、山さ上がった。

だんご殿

(西方)

あつたどー。昔、じいさまとばあさまがいたどー。ある日、じいさまが、山へ仕事に行くので、ばあさまに、

「中飯ちゅうはんをつくってくろ」

と言つたら、ばあさまは、じね(大きな)ーだんごをこさえてくつちやどー。じいさまは、しえんけんに仕事して、そして中飯になつたので、そのだんごを広げて、くおうかと思つたら、だんごがコロコロ、コロコロところげていったどー。そして、じいさまは、

「だんごどの、だんごどの、どこまで、どこまで」

と追いかけたら、だんごどののは、

「せんぞの宮^{みや}まで、こけらぞうの堂まで」

そしてまた、じいさまが、

「だんごどの、どごまで」

と言うと、だんごどののは、

「先祖の宮まで、こけらぞうの堂まで」

って、ころんでいったどー。そして行ったら、下の方に古ぼけたお堂があっただどー。そうしたら、お堂の中にいた地蔵様が、そのだんごを拾ってくつちまっただどー。それで、じいさまが困ってしまっ

「地蔵さん、地蔵さん、そのだんごは、おれの今日の中飯だから返してくろ」

地蔵様に言ったら、地蔵様が、

「くつちまったから、とても返すようねえ。そんだったら、今晚一晩、おれんとこ泊まってぐど、そのかわり、おめえにいいものくれてやつから、泊まってげ」

そう言ったど。そんでじいさまは、しかたなくて、

「んじゃ、今夜は地蔵様のとこさ、泊めてもらうべ」

って、泊まったんだどー。そうしたら、だんだん暗くなってきたら、地蔵様が、

「じいさん、じいさん、そこにいたんではだめだから、おれのこの衣^{ころも}の陰さ隠れる」

そう言ったんだどー。そして、

「夕方、だんだんに暗くなってくつと、こうさ赤鬼や青鬼や鬼たちがいつぱいくつから、^(そのとき)そんなときは黙ってて、おれ、合図したら、コケコツコーと、鳥の鳴くまねしろ。そうすつと鬼たちが、ああ、これは朝になったから、人間がくつとたいへんだって、みんないってしまうから、そんなとき、おめ、出てくるように」

そして、じいさまが地蔵様の衣の陰さ隠れていたら、だんだんに暗くなってきたところが、あつ^(ち)つ^(ち)からもこつ^(ち)つ^(ち)からも、赤鬼や青鬼が宝物や銭や、えっ^(い)ぱい持って、そのお堂が集まったんだどー。そして今度はそこで鬼たちが、酒盛りをしたり踊ったり、歌ったりしたとき、地蔵様がじいさまに、合図したんだとー。

（それで）
そんじじいさまが、

「コケコッコー。夜が明けたー」

ニワトリのまねしたら、鬼たちはあわてて、

「あ、今、一番鳥が鳴いたようだ。早く帰んねえと夜が明けて人間様、くつとたいへんだ」

みんな帰る支度しただと。そんなとき、また地蔵様が合図したから、じいさまが、

「コケコッコー。夜が明けたー」

って言ったたら、鬼たちは、

「そうれ、今度は二番鳥だ。三番鳥が鳴くと、もう夜が明けて人間様くつから」

大急ぎでその宝物と食べ物やなんかみなおいて、もう逃げつまったど。そこで今度は、地蔵様が、

「じいさん、じいさん、もうだいじょうぶだど。鬼たちはみないなくなつたから、おめえにこの鬼のおいていった宝物全部、きのう、おれごつつ（ごちそうに）おうなつただんごの代わりに、おめにくれてやつから、みんな持つてがっしやい」

じいさんは大喜びで、それを持つて帰つただとー。そして、ばあさまが、

「じいさん、きのうは帰つてこれなかつたけども、どうしたんだ」

と聞いたところが、

「じつは、こういうわけで、こけらぞうのお堂さ泊まつてきただ。そして地蔵様に、これだけの宝物やみやげ物、もらつてきただ」

と今までの話したら、こんだ隣のわりー（悪い）じいさまとばあさまが、それ聞きつけて、

「よし、じいさん、おらん（も）つも、んじや行つて宝物もらつてこ」

なんてわけで、今だそのあしたは、欲張りじいさまと欲張りばあさまが、やはり、いいじいさまとばあさまがやつたように、だんごを作って、そして山さ行つて、わりいじいさんが昼飯くおうかと思つたとき、だんごがころばねえんだ。そんじ（それで）、わりーじいさまは、ころばねえだんごを無

理やりころばしてやって、

「だんごの、どごまで」

つたつたつて、だんごは返事もしねえ。あれ、隣りのじいさまは、あそこのこけらぞうのお堂で、つっていったそうだから、そこまですこばして行ったら、そこにお堂があっただど。そうだけれども、地蔵様はそのだんごをくおうとしねえ。そいて無理やりに、

「地蔵さん、地蔵さん、このだんごくえ」

つて、そしてくわせて、んじくつたところが、きのういじいさまがやったように、

「なんだ、今くつただんご返してくれ」

そしたら、今度は地蔵様が、

「いや、話がちがう。おらは食べたくもねえんだが、おめに無理矢理、食べろ、食べろつて言われたから、食べたあつて、食べてすま^じったもの、今んなつて返すわけいかねえ」

つて言ったところが、

「そうだったら、今夜またおめえん所、おれも泊めてもらうから、きのういじいさんがやったようなことやつてみる」

つって、んで、地蔵様は仕方なくなつて、きのうやったように衣の陰さ、そのわりーじいさんを入れて隠しておいてやつたところが、夕方になつて、赤鬼、青鬼、いっぱい集まつてきたんだとー。そうしたら、そのわりーじいさんは、地蔵様の合図すんのまつてらんにかくて、鬼たち来たらすぐ、

「コケコッコー。夜が明けたー」

つて一番鳥のまねしたら、鬼たちが、

「いや、そんはずねえだ。今来たばっかしで一番鳥、鳴くはずねえだから、そこいらになんかいるはずに相違ねえ」
つて搜したら、その地蔵様の衣の陰に、そのわりーじいさまが隠れていたのが見つかつて、そしてこんだは、鬼にひどいめにあわせられて帰つてきたんだと。

ざつと昔、さけえもうした。

目の不自由なびわ法師が、山越えつとときに休んで、びわならしてたら、大変いい音を聞きとれて、大蛇が来て、

「大変いい音を聞かせてもらった」
って喜んで、

「そのお札に、おまえの命を助けてやりたい」と言う。それで、なんだかと思っていたが、それは、下の村をわが住み家にしてえたために、村をみな埋めて、沼にしちまうことを考えていたんだと。したけど、

「おめは、下の村さ泊まっても、このことはしやべっちゃやなんねえぞ」

と教えられた。したけど、

「おれがひとり助かってても、下の村の人が死んではこまる」というので、下の村にいつて、今あったことをみんな教えたとそうだ。

じさまとばさまがやったとー。娘がはた織りしてつと、毎日きれいな男が遊びにきいきいしたつけな。そしてこんだ、ある隣の人が、

「いつも、若い男が来るわ」

と思つて見たと、そのうちん中を。そしたらこんだ、はた織機の柱にへびがからまっていた。そしたら、その毎日通つた男はへびだったんだと。その娘のところへ通つていたのはな。

そしてこんだ、その見た人が、

「あれはなあ、人間ではねえぞ。へびなんだから。へびつていうのは黒金がきらいなんだと。その男の着物の下の方さ、針で縫つてみる」

と言つたど。

そしてこんだ、おしえられたとおりにやつたど。そしたら、その者は来なくなつて、そのあとをみたら、血をたらし

らし行ったあとがあったと。そしてこんだ、奥山の深い岩
穴みたいな所までだどっていったら、そしたらこんだ、中
にな、親がいて、

「主はなあ、いぐなつていうのを聞かないで、いってつか
ら、そういう目にあう」

と言ってやったと。そやけんど、

「おれはな、今おれがなくなつても、おれが子どもができ
たんだ。その子どもをつけてきたんだから、おれが命がな
くつても、おしくない」

そういったんだと。通っていたへビが。そしたら、おかあ
さんが、

「そんなものはだめなんだ。へビの子ひつつけても、五月
の節句にしようぶ湯さはいれば、子どもつていうのはおち
てしまう」

ということをしやべつただと。それを聞いてきた。そして、
娘は五月の節句に、しようぶ湯をたてて、へつたんだと。

そしたら、しようぶ湯の中さ、へビの子がでたんだと。そ

いたから今でも、しようぶ湯をたてるんだ。

かさ地蔵

(西方)

じいさまとばあさまがやったとー。

じいさまはなあ、山へ柴きりにいくんだ。ばあさまは、は
た織して、三年三月二十九日かかつて布を一いったん反織りやっ
たとー。そんでこんだ、布をじいさまが町さいつて、くらし
のために、

「ぬのやー、ぬのやー」

と言って、なんぼ歩つても歩つても、たーれも買い手がな
かったと。そんでこんだ、帰りに地蔵さまがいやつたと。

そして、その地蔵さまに布をあげてきたと。そして、ばあ
さまに、

「ばあさん、ばあさん、布は売れなかつたど、地蔵さまさ

着てもらおうようにあげてきた」

と、こう言ったと。

「それはいいことをしやったわ」

にぎやかな音がすると思ったら、その家の前さ来て、音がして、明日の朝おきてみたら、そこに金がいっぱいあったと。

やきめしかぶり

(西方)

しんしょう持ちで、嫁さんもらわねえでいる人がいたんだ。こんな雨の降る晩、きれいな女が男のところに来たんだ。

「こんばんは」

って。

「道に迷ってなあ、しゃあねえから今晚ひと晩とめてくれ

や」

って言って、そしたら、

「とまっていけや」

なんて言って、その男が泊めて、ひとばん泊まっても、ふたばん泊まっても、いがねんだと。それが、なかなか気がきて、なんでも家ん中やっつくっちゃえ。そんだけこんだ、かまわねえでおいといたんだと。

その間、女は何も、ものくわないんだと。そんで、男には、なんでも食わしてくれんだと。そしてこんだ、隣の人

が、
「いい女が来てっけんど、そんだけんど、もの食わねえと
いうのは、どういふもんだべ」
って見たそうだ。

男は毎日、仕事へ行くんだ。昼はいねえわけだ。その女が留守しているわけだ。そんで、その人がのそいたわけだ。そしたら、大きな釜さ、まんま炊いて、おにぎりいっぺえならべたと。そして見てたら、そのおにぎりをいっぺえ頭

さかぶつちゃあと。それからたいへんだ。大蛇になったと。蛇っていうのは人間に化けんだと。そうしたら、その男に教えて、

「家の屋敷の上のぼって見てろ」

と言ったんだと。そしたら、その男が見たわけだ。そしてらやっぱり同じく頭さかぶつちまったと。そしたら、その男が逃げだんだと。

そしたら、女が魔ものだから、大蛇になっておっかけてきたんだと。男はよもぎとしようぶの中にかくれたんだと。蛇はしようぶとよもぎで死んじまったと。

兄弟二人と山姥

(西方)

昔は、よく猟師っていう、キツネとかタヌキとか山からとってきて食ったりなんかしていたんだべ。食うものいっ

ぱいしょって山へいったと。兄さんの方がその日なんぼあるつてもあるつても何もなかったんだと。しまいに夜になつちまって、うちさもどれなくなつちまった。こまつたなあと思つて、そうしたとこに、大きな木んとこさ、ぶつさけたちようちんがぶらさがつていて、その中から山姥がでて、車を出して糸ひきをはじめた。これはたいへんだと思つて、鉄砲でぶつた^(撃)と。ぶつたげんじ^(げんじ)、ちつともあたんねえど、山姥はあくびんどして、

「アーアーアー」

と言つていたんだと。いまい^(あとい)つばつ^(発)になつて

「はあ、これしかねえ」

と思つて、それぶつた^(と)と。ぶつたけんじ、あたんねえから、しようねえから逃げたんだと。そしてこんだ、なんぼ逃げても人間とそういう魔ものではかなわねえわな。そんで、つい食われつちまったんだ。

弟のほうは、はんぼ兄さん待つてても来ねえんだ。

「こねえな、こねえな」

と思つて、ひとばん待つてたど。

それでもあしたになつても来ねえから、こんだ、われが兄さんみたいな食い物いっぱいしょつて、鉄砲もつて、たまもつていったんだと。

そしたらやつぱりその日も獲物が何もとれねえで暗くなつたところ、今のような魔ものが出てきたんだと。ちようちんがさがる、そつから山姥が出る、糸ひきするつて、そしてこんだ、それも一発になつちまつたんで、神さまに祈つて、そしてこんだ、思い出したことに、ちようちんさぶてばあたるということを思い出してな、山姥の姿でないちようちんさぶつた。そうしたらこんだ、あつて、山姥をしとめたんだ。

われの命は助かつたんだけど、兄さんが山姥に食わつちまつて、鉄砲はなげてある。骨はそこらにちらばつて、兄さんの方は死んだんだ。

ザットムカシさけえた。

猿婿入り ①

(松原)

昔やつぱりこんな山の中に、おじいちゃんがおばあちゃん亡くして、そして娘三人持つて、せんがり田んぼ(とゆう)つて大きな田んぼに水がかかなくなつて、そんで山さ行つて、

「誰かなあ、このせんがりの田さ、水かけてくれる人がいたら、おれは女の子三人持つていんだが、三人のうちどれでも一人、娘くれるから、かけてかれつといいがなあ」

(とよつて)ちつていだら、猿が出てきて、

「じいさま、何がいったの」
ちつたら、

「このせんがりの田さ水かけてほしいだけんじよも、何も雨は降んねえし、水かけて(くれた)やら三人娘いつから、どれでもあげるつてそう言った」

つて。ほんで猿が本気にして、

(それなら)「ほじやら」

つて、水どんどんかけてきちえ、そしていたんで、おじい

さんは家さ帰って、

「いやいや。猿にあんなこと言ってしまったげんじよも、娘にいやだって言われたらどうしよう」

と思つて、向こう鉢巻きになつて苦労して、おじいちゃが寝でだつて。したら一番末の娘が、この子はとても感心な子で、一番安じて、

「おじいちゃん、何心配してんの」
つて言つたら、黙つて話し出せねげだつて。

そして一番大きな娘が来て、

「じいちゃん、何かしたの」

(と云つた)
つてつたら、

「うーん。せんがりの田さ水かけてくれる人がいたら、娘三人いつからくれるつったんが、おまえ行つてくんねか」

(と云つたら)
たら、

「いやだ」

つて。そしておこつて出て行つたつて。そして二番娘もやっぱし聞いたら、

「いやだ。自分が行きなさい。そんな口きいて」

つて、二番娘もとてもおこつていで、したらこんだ三番娘がやっぱその話聞いて、

「そんだったらおれが行ぐ」

つて、聞きわけて嫁さんに行つたんだつて。で、行つたら節々(節句)に親に礼に来つがら、そんでお餅ついで、三月の節句になつたら、

「礼に行ぐからお餅ついで、おじいちゃんにみやげ持つて行く」

つて、そしたら、

「握つて持つて行くべ」

たら、

「おじいちゃんは、とても手くせえからいやだ」

つて、白(こ)と背負うごてらしよつこぐと喜ぶから」

ちつて、ほんだから猿は力持つてつから、

「白(こ)と背負うごてらしよつて行くべ」

つて、白しよつて出て行つたつて。そして行つたら、昔

三月って言えば、やっぱり旧だから桜の花が、川の流れて
いる上の方さ咲いでる。

「うちのじいちゃんは、とでも桜の花が好きだから、あの
花一枝欲しいなあ」

って、娘が言ったら、

「よし、そんでは採ってやる」

ちって、臼、下におつけて登^(登)るべど思うと、

「その臼おろすつつうど、家のじいちゃんは土くさいから
いやだから」

って。そして

「ほんじゃら、しよって登る」

って、木の上さちよろちよろと臼しよってまま登って、

「この枝か」

つうと、

「ま^(ま)つと上の枝」

つって、してだんだん上の方まで登せで、細かいところま
で登せで、

「この枝かー」

って、言っているうちに、どさーんと上から臼と一緒に落ち
で、そのまま臼の下敷きになって死んでしまったんだと。
そんでめでたしめでたし。親孝行もしたし、猿も死んだから、

「まあ何もな^(無)がって、これからのんびり暮らされる」
って、家さ帰ったと。それで終わったって。

瓜姫

(松原)

昔あたどー。じいやとばあやがいであっだどー。じいや
は山へ柴刈りに、ばあやは川へ洗濯に行ったんだ。そして
小さな箱が流れて来て、そこさ瓜が入って流れてきて、

「これはいいもの見つけて来だど。早く帰っておじいや
んに切ってやんべ」

と思つたら、中がらかわいい女の子が出てきて、ほいで、

「何とつける」

って、言ったら、

「瓜から生まれたから、瓜姫とつけんべ」

なんて、そしてかわいがって育てたら、(今度は)こんたおおきくな
って、

「機織りしたい」

って、言うから、

「そうか」

なんて言って、こんだやっぱりおじいちゃん、おばあちゃんも働かねえとしよねがらつつって、

「こんだ山へ行くから、ここではあまのじゃくが来て、く
つづく食べらつてしまおうがら、何ぼ戸開(と書いて)けてつても、戸開
けらん(それ)にえつて。ふんだから決しておらたち来るまでは戸
開けんよ」

って、言つてたの。そいで違いなくやっぱりあまのじゃく
が来て、

「瓜姫、瓜姫、機織りか」

「機織りだ」

って、言うど、

「二本指入るほどでいいから、戸開けてくれ」

(と書いて)
つちど、

「開けらん(と書いて)にえ」

って、そして(このように)こんしつこく騒ぐから、すこし開けてや
つと、

「二本指入るほど」

って。そしてしづこいからしまいに、

「腕入るほど。頭入るほど」

って、しまいに(と書いて)もぐつて食べちまつて、あまのじゃくが機
さのさつて、瓜姫に化けて機織つてたら、おじいちゃん、
おばあちゃんが帰つてきたら、うぐいすが鳴いだつて、

「瓜姫の機さ、あまのじゃくがのさつた。ホーホケキョ」
って鳴いだから、おじいちゃんとおばあちゃんは留守にだ
なつちで思つてたら、入つたらみな食べちまつて、そし
て機の上あがつつたつて。

やっぱり家は空けらんになんて思ったけんじよ、やっぱり働かねえで家にいらんねえから、家にいねえから働いているうちに食べられてしまったんだって。

おわった。

三枚のお札^{ふだ} ①

(松原)

昔あったそうだー。お尚さんが奥山に暮らしていて、小僧さんをお弟子に入れて、

「小僧、小僧。お盆になったから盆花とりに行ってこい」
ち^(と)って、そして行ったら、ずんずんずんあんまり遠くの山さ行き過ぎで、そしてこんだ帰るのは、は^(も)あだんだん暗そうになって、そんで行ったら、どつか道に迷ったように、夢中になって山さどんどん行ったら、お寺でなくて明りが見えっからと思つて、小僧が何とかして明りを頼つて

行ったら、山姥の家であつたつて。そして、

「道に迷ったから、今晚一晚泊めて」
つて、言ったら、

「早く入つて泊まれ、泊まれ」

つて、何かこう不気味な気持ち悪いから、寝ても寝たふりして、こうして見たら、そん^(そのとき)とき包丁とぎしてたつて。そして、

「おトイレさ行きてえから、どこだんべ」

つて、言ったら、からだ縛つて逃げつと^(任方がない)しようねがらつて、紐つけてトイレさ行くと、したらあんまり出てこないから、

「小僧、小僧、まだか」

つて、引つ張るつ^(という)つと、お尚様が最初にお札三枚くれて、
「何か恐ろしいことがあつたら、そのお札を一枚ずつ投げろ」

つて。トイレさぺたつと一枚貼つたら、小僧さんに代わつて、

「小僧、小僧、まだか」

つたら、
(と書いた)

「まーだだ」

って、返事がすんだって、お札が。ほんで、まーだ(いる)いな
と思つて、山姥が安心して、でもあんまり来ないから、

「小僧、小僧、まだか」

って、そうすつと。

「まーだだ」

って、何回でも返事して、

「そのようにいつまでもいるか」

って、ぐつと引つ張つたら柱がひん(抜けて)のげてきちやつて、ば
あさん力があつから。そして、

「このやろう、逃げたな」

って、こんだ追っかけて追っかけて、まだ後ろまで来そう
になつたから、

「大山になれ」

って、札まいだら、こんだ大山が後ろさ出てきて、そんで
もその山、山姥が越えて一心に追いかけて出てきて、また

追いか(つき)けそうになつたから、こんだ、

「大川になれ」

って、またお札投げたんだって。したらお札がまた大きな
川になつたけんじよ、その山姥が本気になつて川越えて、
また行きそうになつたら、ようやくお寺さ、その小僧が着
きそうになつたら、

「お尚さん早く。山姥に食(食われ)わつちまうから、戸を開けて」
って。そのお尚さんは、いやー、

「ふんどしが無い、帯が無い」

って、なかなかその戸を開けるまでが暇とれて、して食わ
つちまうんじやないんべかな。

ざつと昔さかえました。

股がり大根

(桧原)

十二月の九日に、大黒様が旅に出たって。そして大黒様は神様みたいな人だから、あっちこっちでごちそうをいただくから、とても腹やけとか胸が熱くなったり胃が悪くなつて、ある所に道路より下に女の人が大根洗いしてたって。そして、

「その大根、胸やけるから一本くんねか」
つちつたら、

「うちのご主人はとても厳しい人で、何ほ何ぼ「いぐさ」って教えてあれすつから、ほかさ分けることできねえ」
つて、そしたらちようど股がり大根で、二つくつついた大根があつたから、

「ほんだから、これさ半分取つて、これでもよかつたら」
つて、分けてきち「あげた」やつたつて。

そんでそれを食べてとても助かつたつ「と言つので」つんで、十二月の九日には股がり大根「供え」あげて、あつたためたり古いご飯でなく、

いくらご飯あつてもたくさん炊いで、そしてお供えして、

「十二月九日は、股がり大根「なご」なんか忘れんなよ」
なんてうちのばあさんなんか、よく言つてたが。して、その股がり大根ないときは、二本小さいのあげるんだなんて話、聞いたことがあんだ。

食わず女房

(桧原)

「ご飯食べさすのがおいしいから、ご飯も何も食べない嫁さん欲しいと思つていたら、夜、いい女が来ただつて。それで、

「二晩泊めてくれ」
つて、入つて、

「何でも家にはねえんだけんじよも、そんでもよかつたら」
ちつて、

「それでもいいから泊めてくれ」

って、入っていたら、

「嫁さんにしてくれ」

って、言うんだって。そして、

「こんなところでもよかったら」

って。そしてだんなさんは働きに行ぐし、家に留守番やっ
ていだけんじよ、だんなさんと一緒にはご飯食べねえん
だって。食べねえで見でて、だんなさんにだけ食べさせて
いるだけけんじよ、出て行った後で、自分でご飯炊いで、
そうしてまりつきのようにして頭からどんどんどん、
パクパクパク食べんだって。

そして何だか米がなくなっと思って、屋根からのぞいて
見たら、ご飯ひとりで炊いで、だんなさんの居るときは食
べないが、だんなさんが居なくなっと思って、まあそれが
大きな大蛇であったんだって。

そんでそれを見てからは、片っ方も見られだと思し、
片っ方も見だから、とても恐くなって、お互いに。そんで、

「世話になった」

ちって、大蛇になって出て行ったって。

大男と女の子

(桧原)

昔、力の強い豪勢な人がいたって。そんでその人は仙人
みたいになって山きこもって、一人暮らししてたつうが、
山男っていうのか、大男っていうのかな。そんでいい女の
子が隣り村から子守に来てたんだって。

子守に来てたが、急に村の下の橋の上さ下駄をそつぐり
脱いで、そのままさらわれてしまったんだって。

どこさ行ったんだか今のようによく願ったってもしねが、
何が見えなくなっって大騒ぎしたけんじよ、よその借りもの
いなくなっったから騒いだけけんじよも、何ぼしても見えねか
ったんだって。

そんで豪勢な男が、まあ薪なんか切ったんだら、一晩で山ほど切ったんだって。ほんで、

「確かにそれにさらわつちやだべ」
って言ったたら、

「ちげえねえ。その山男に女の人さらわれて、ほんでやつぱ生まれ里さ何年に一回って送って来んだって」

ほんだけんじよも、その生まれた家さいつまでもいることできなくて、時間になつ(なる)つうと迎えに来つがら。そして風ののるみてえに、ゴーツとひどい音したと思うど、その女の子をさらって行って、そしていつまでも歳とんねんだって。米やなんか食べないから。ほんで熊とつたり、山のものとして食べてつがら。んで、今では子供もいんだって。

そんだけんじよも、帰って来て見(見る)つちゆうといなくなつたときそのものだつて。歳とんないって。ほんで子供も幾人もできて、暮らしていつけんじよも、家さ来るようねんだってという話があつたつて。

カワウソとキツネ (桧原)

カワウソは、とても魚とつてじょうずなんだつて。そんでキツネがうらやましぐつてしようねが、

「どうしてそんなに魚とつてじょうずなんだ」
つてつたら、

「とてもさむーいかんずる晩に、川さ尾つぽ浸してつと、川の魚がその尾つぽさつくだ」

つて、カワウソがキツネに言つだつて。したらキツネが本気にして、さむーい晩に川さ入つて尾つぽ浸しでたら、し(ま)めに尾つぽがしみづいちまつたんだつて。ほんで、

「オブナもコブナもいらなぞー。おいやらしようと、
のうげ(抜け)でぞー」
つて、力入れやつたら、しつぽまでのうげでしまつたんだつて。そしてカワウソとひどくけんかしたんだつて。そんでキツネが負けたんだつて。

人喰い神様

(滝原)

むかし、神様がひと喰い神様で、一年に一人ずつ娘を納めなければならぬ。

ある侍が、

「そんなはずがねえよ」

そのうちを通りかかったども、うちの中で泣く声がする。入ってみたら、

「こういうわけで、おらがちの娘を納めにやらんねえから。神様が喰うんだ」

そんなはずがねえから、その人が、

「代わりに俺が入ってるから、犬を一匹借りてこ」

犬を一匹借りてきて、箱さ入れて、その晩納めた。そうしてきて、それがヒビであった。神様が喰うはずがねえ、でんで、犬がいたから犬郎っていったその犬が、

「太郎におせらんね。太郎におせらんね」

という。その侍が入っていた。ふたを開けたら侍が切りつ

けた。切りつけたら、逃げていった。

みそう台

(滝谷^{たきや})

みそう台っていう地名はどっからでだがっていうど、権現石のふもとに、滝谷の先住の人たちが、五、六軒おったわけだ。その一軒がいわゆる、じいさんばあさんがおって、そのじいさんばあさんが、非常にその、つけものじょうずなじいさんばあさんであった。

そして、岩ののろをとって、いろんなものをつけて、それをこられた人に、ごちそうして、この付近では、あそこにつけものは特別だ、あそこの味噌は特別だ、というようなことであったと。豆を作って、そして味噌をしこんだり、それからつけものとして、みんなに与えたりしていた。

ある日、たまたま和尚様がこられて、おおみねという部

落非常に、はやり病がはやっていて、ほとんど貧しいために塩しか食っていない、味噌汁を食べて死にたいなあってゆってる。それがたまたま弘法大師が、そこを通りかかって、

「そうか、私が行って味噌を、うまい味噌をもつてくつかな」

ってゆって、病人の頭をなでながら、みそう台つてとこさきて、そして、じいさんばあさんのうちへきて、

「どうか、味噌を分けてください」

ってうゆったら、快く分げでもらって、権現岩つてゆう岩を登って、みそを、おおみねの住民に食べさせたら、みんな治った。

「ばあき、ばあき、酒ねえが」

ってゆつてくつから、その酒を「竹」とわざと聞き違えたふりをして、

「いいかげん、七十近くなった」

と聞こえんだけど聞こえないふりして、

「何、ああこつちだから」

って、その「酒」と言ったのを「竹」と聞き違えたふりをして、竹林へ役人を連れてくわけ。

「これ、おらいの竹だ」

「竹でねえ、酒だ」

「酒、酒なおらいにはねえから」

そのうち、うちの若い人たちは、さつさとかくしてしまふわけ。

猿婿入 ②

(早戸)

じいさまが、まい(毎日)につ、まい(毎日)につ、田を作っていたら、だれか手つだあ人がいたんべや。

娘(娘)は、は(娘)つ(八人)う(いる)ま(の)持(に)つてんてに、娘は手伝わねえす。困つて、

「だれかきて手伝わねえか。手伝う人がいねえかなあ」と一人言を言っていたが、

「もし、手伝う人がいたら おらの娘を一人(くれても)くつちえもいんだが」

と一人言を言っていたが、山から猿が降りてきて、

「じいさん、じいさん、今なんてった。手伝うこんだ娘くれるって今言ったんでねえか」

猿が、聞きつけて、して、

「いや、それ言ったが、まいにつくたびつちやあ、あきちまった。やっぱあんになつちま」

「んじや、おれ手伝うからおれが娘一人おれの嫁にくれ

ろ」

「ああ いいとも いいとも、一人くれつから、じゃ手伝わんてくれ」

猿がきて、本気なつてやったら、たちまち田ができちまった。

「はあ、田もできたす 娘さ一人あしたむけえにくつから、(あしたでは、ねえのかなあ・・・)。いつきたらいいか、じいさまのうちまで行くつから」

つて、じいさまは、田はできて喜んでいたが、こんだあ、いよいよ考えて、うちへ戻つてみて、たいしてまあ 帰つてきたつてまあ。なるほど娘は八人いるんけつど、なんと口に出したらいいかと思つて、ばあさまに相談してつたら、ばあさまが、

「はあ、猿(嫁)のお方(嫁)なるような子げないらん。一つ じいさまからしゃべつてみる」

じいさまは これが困つて、どれにゆつていいかわかんなくつて、頭痛くつて 朝なつても起きらんねえ。そしたら

娘 一番でっかい娘が、

「じいさま、じいさま、起きてお茶でも飲まっしやい」

「つきやんだってごせき、どうも今日は頭が痛くって起きらんねえ」

「お茶とか湯とか飲めば、なおっから起きらっしやい。なんでそんなに疲れたのが」

「いや、じつはこうゆうわけで、猿とはあ おら娘一人くれる約束をした。おまえ、行っくんにかいか」

とこう、娘にもうとげ、

「いやいや、やだなやだな、猿の嫁に行っられっか」

さっさと、いずば切られて、次の次もそうやって、じいさまのそこさきて、言ったものがっしや、みんなことわられて、

「じいちゃん、ほしくねえな。山の猿のそこへ行っくろじやんがに」

最後のいちばん末娘ばちつ娘がきて、あり、頼んだ。

「よすよす、おれ、猿の嫁にでもなんでもいいから、さあ

起きてお茶でも飲んで、ごはん食べらっしやい」

と言ったら、よかつたと思っつて、一ばんばちつ娘だから、

じいさまとばあさまにすては、最高のかわいい娘、すと簡単にひきうけて、じいさまをいとおじやんだん。してよかつたと思っつたが、まあ、くれてやるのもしんぺいだが、約束だからしよんねえ。そしたら猿が、あんまり返事がねえもんで、たずねてきて、

「じいさま、約束だぞ。娘一人もらっつてが」

じいさまとばあさまは、約束だからしよんねえ。泣く泣く一ばんばちつ娘のあれを嫁にくれてやっつた。

して猿は、喜びいさんでそれこそ山さ、自分のすみかさ連れて行っつて、そして、今にも婚礼すつと必ず、ん戻りつて、一回、家家、帰んにやならん。そんで、そのばちの娘が、猿にゆっつた。

「せつかく、うちさは、必ず一回は人戻り。そうすないと、ほんとうの嫁 婚礼にはなんねえだよ。あー、もちでもついで、それをしよっつてけえんなあね」

そんじ、猿もまあ、うすめを洗濯してきて、二人でもちついて。ところが入れ物がなが^(ない)がされち。お重箱さ入れちえんか。たいしたうるしの箱を見つけてきて、それさ入れべえと思つた。

「そのお重箱ちゆうのは、うるしくさくて じいさま ばあさま、大きれえだ。たとえ持つてつてもくわね」

「そんじや、なんにもものうしねえから、瀬戸のどんぶりさ持つてく」

「おらのじいさま、ばあさまつてゆうのは、どんぶりくさくつて、とてもだめ」

まげものをあれしたり、いろいろやったが、そうしたらやつば、ありもくさい、これもだみだつてわけで、

「んじや、めんどくさいから、うすごと持つてくつか」

「あー、そうなりばこれは、いつ^(いちばん)つきたてで、なんぼ喜ぶかわかんねえ」

でつかいうすを用意したわけで、猿にしよわして、そして二人で、花嫁だから、じいさまんち、けえつてきたんだ

よ。二人で山を下つてきたども、ちようど早戸の川のきしまの岩の上に、たいした桜花が川に沿つてた。

「桜花ひと枝、みやげに持つてつたらじいさまとばあさま、だい^(大)ん好きだから、どんなに喜ぶかわかんにえ」と、その娘が一人言ゆつた。

「よし、そんなの、わけねえ。おれ行つてふんだつてくる」
そして、うすしよつてたの、降ろしてめえと思つた。

「いやいや、とんでもねえ。そのうす下へ降ろしたさは、土臭くつて、これは、もち食えなくなつちまう」

「んじや、うすしよつたまんま登る」

そして、その枝さ、バアーと登つて、手くらのとこまで来て、右の辺りの枝がある。

「今ちーつとその先のものが、非常に枝振りもいい。色もいいがら」

娘がゆつた。その先へなりますと、先がなあ細い。その取るのは、うすしよつてつから重みある。いつ^(いづ)ちもの猿と、こんだ、違う。枝、細いとこいって、折んべえと思つたら、

自分のせいである、そびゃあ、枝とも折りて川人中、スポーンと落ちちまった。して、流れて行くとき、

猿沢へ流れる命は惜しまねど、

あとのお姫はなんとなるらん

って、流れちやうんだって。

三枚のお札 ②

(早戸)

小僧がまあ、なかなかゆうことも聞かぬ、いいこともしねえだから、和尚様が、いいつけて、ようたしに山へやつたが、道に迷っていったと。そんで、日が暮れる頃になつて、行つたら、山姥やまんばにであつた。それで、その前にお札を、山の神様にもらつた。山の神様が、

「おまえはこれで、道に迷つたとき、山姥が山さでつから、逃げつとき、山になるお札、川になるお札、火になるお札、三枚くれつから、このお札で、おまえは逃げていい」
ちようど、行つたら山姥にでくわして、

「小僧が、小僧が、小僧が、頭から食つちまうぞ」

小僧が恐ろしくなつて逃げてきて、あれしたが、いつとう最初に、つかまらんとしたとき、

「山んなれ」

と言つて、そのお札を山姥に投げたら、山姥の前に、だつと山ができて、その山ん中を、ガサガサガサ越えて、またそのとき、ずい分逃げたども、また逃げきらないで、きたから、今度は、

「川んなれ」

とお札を投げ、そうしたら、ドインと川んになったが、山姥だから、川ん中、ザバザバザバして、その間、まつと逃げて、川を越えるうち逃げたが、まだつかまりそうになつて、そうすつと、また、今にもつかまるばかりにな

ったから、

「火になれー」

と投げた。そしたら一面みな火になった。その火のおさまんねえうちは、やっぱ山姥も、追っかけることできねえだから、どんどん逃げて、ようやくお寺まで、たどりついて、そうして、お寺の門を叩いて、

「和尚さん、和尚さん、山姥に追っかけられっちゃ。早く開けてくろ」

だが、なかなか戸を開けてくれっちなねえ。和尚さん、

「なんだ、けえってきたら。よかったの」

くれのことあれして、

「いやー、山姥に追いかけてきらっちな。早く戸を開けてくろ」

「ひら持ってっか」

「ひらもってねえ」

「じゃ、しゃくすっか」

そうやって時間かせぎして、和尚さんが。そのうちに山

姥が追いついてきて、小僧は、食われちゃった。

桃太郎

(桑原)

じいさまとばあさまが、昔いやったと。ばあさまが、川へ洗たく、じいさまが、山さしば刈りに行ったと。ばあさまが、洗だぐしていながら、川上みだら、桃が流れてくんだと。きれいな桃が流れてるわと思って、とらってみたら、大きないい桃であったと。

これはうちさ持って帰って、おじいさんと二人で食べようって、こう考えて、それから、持って帰って、じいさま山がら来るまで待ってて、じいさまに切らせんべえと思っただと。ばん(まな板)と包丁持ってきて、切らんべえと思ったら、桃がさつくりと割れて、中から男の子が生まれたんだと。そうして、桃から生まれたから「桃太郎」と付けたと。そ

の子が大きくなって、

「鬼がおるっちゅう島に、鬼退治に行きたいがら、仕たくしてくれ」

って。そして、じいさまとばあさまは、鬼ていじの仕たくして、しょうぞく作ってくれた。こんだ、じいさんは旗作ってくれで、それではあさんは、きびだんごを弁当につくって、日本一のきびだんごっちゅうんだが。そこさ、犬が出て、

「桃太郎さん、どちらへおいでになりますか」
って聞く。

「鬼が島さ、鬼ていじに行く」

「お伴しましょう」

って、犬がついでくる。そして、少し先き行ったら、こんだ猿が出たと。猿もそのとおりにお伴して、それからまた少し行ったら、こんだ猿が出たと。三人のお伴を見つげで、鬼が島さ向かったと。向かって行ったら、鬼が島さ行ったら、鬼が鉄の門さ閉めて、寄せつげねえと。

「えいやー。えいやー」

って、犬は犬でもつてふつぱたぐ。猿は猿でひっかけたぐるな。きじはきじであれしてただか。そうしてこんだ、鬼の親方、大将負げて、桃太郎に負げて、そうしてこんだ、宝物いっぺいだして、犬、猿、きじが、車引いて、うちさじいさんばあさんとこさ、みやげば持って、けえってきたと。じいさんもばあさんも、喜ぶこと、喜ぶこと。

猿カニ合戦

(桑原)

【途中から】・・・に行くって、仕たくしたら、カニにぎりめしをひろった。猿は柿の種見つけた。さるはカニのにぎりめしが食いたくて、そんで、この柿の種とにぎりめし、すつけえろって。カニはやっぱ負けと思つたから、とつけえた。行かねえで、カニは柿の種うめんだと。猿ば

っかり行ってこうって、

「おれは植えでっから」

って、けえってきたら、柿の木がおえで、

「柿がなる」

なんていうようになっただと。猿はけえってきて、こんだ、その柿がほしくなって、カニが、

「登れねえがらとってくれ」

から、どって登って、猿がうめえのみんな食って、渋いのカニにぶつつけただと。カニは死んでしまったと。そうしたら、子ガニがでてきて、泣いていだところさ、うす来た。ハチもくる。

そうして、それからかたきとってもらったと。ハチは戸のかげに待つで、猿来つとさす。うすは高いところに待つで、猿が逃げでくるとこを、おつつぶしただと。

そんじえ、かだぎとってもらったと。猿は死んでしまったと。

【笑話】

ばか婿^{むこ} ①

(西方)

あるうちに婿もらっただと。そうしたら、何しろ婿が、数の子好きで、むかし固あい数の子が、かめん中さつけておけつうと、やたらに食べているんだと。しめいに今度はうまくて、

「これを何とか、よつば^(飽きるほど)ら食ってみてえ」

と思って、とてもここでこうつまみ食いしていたんでは、婿だから、

「何だってまた、数の子食ったのか」

と言わっちまったら、いらんねえから、便所さ、かめごと持ってって、便所で食っているんだと。とつあまが便所さ行っただと。かめかぶって隠れたんだと。そうしたらば、まさか数の子食いた婿だと思わないから、しめいにとつあま(むかしは紙などないから、こも石みたいので尻

のごつて^(ぬぐって)いただと)、その石をかめさぶつつけたれば、パツと出ただと。そのばか婿が、

「なんだ」

と言っただと。

「いや俺、数の子食いたくて、かめん中^(顔)つら突つこんだら、出てこねえ。出なくなっちまった。しょうがねえから隠れちやった」

「ほうでやったのか」

「何で、このかめぶつけえした」

しめえに、

「そんな事、お互いに言わねえこつた。はずかしいから、言っばれつと悪いから」

そんなことしゃべんねえでいればわかんねえと思っただと。

「鶴は千年、亀は万年、かめさぶつつけた。こも石で尻のごつた」

俺、悪い事言われちまうと思って、ばか婿が・・・

・・・【以下不明】

ばか婿 ②

(西方)

ある所でけんかをしていた。

「こん畜生、こん畜生」

って、やたらに真中さ入って、人間さまのこと畜生などと
言ってた。そうしたら、

「けんかしてたから、そこさ入って畜生、畜生ってたれば、
頭ぶんなぐれっちまった」

「そんなけんかなどしてたときは、やめらっしゃい。やめ
らっしゃいって、さけるもんだ」

と教えらっしゃれば、よしと思つて、中さ入って、けんか
をやめさせる事を努力しないで、畜生などと言つてつらた
たかれちゃうだ」

このけんかの中さ入って、

「やめてくんてー、やめてくんてー」

つて言つたれば、そこさ角つので突かれちまつて、ひでえ怪我
してきた。

利口な嫁

(西方)

ある日、おばあさんが昔人で、なかなか頑固で、とても
他の人にも口やかましく、家の嫁にも言いてえこと言つて、
大いばりでいただと。そうしてそばの人は、

「あの鬼婆、ほんによくねえ」

とみんなに言われるようになったと。

家に、あつ子という嫁さまがいた。おばんちやが、

「おらの嫁は、どんな気持ちでいるんだべ。俺より他の手
は鬼婆なんて言つてるけど、・・・へおにんばなどと人は言

うらんぐ・・・上の句つけてみる、あつ子」

その嫁さま、なかなか愛きようがいい、

・・・へ仏にもまさる心知らずしておにんばなどと人は言うらんぐ・・・

「仏様にもまさるようなおばんちやなれど、鬼婆などとよくも言うこと」

と嫁さまが言ったと。それから本当の仏様みたいないいおばんちやになったと。その歌一つでなおちちまったと。

とんてんかんてんとんからりん

(西方)

とつあまが山き行つたれば、地べたにかぼちやなどいっぺえーなっているんだと。そのつるさ、こんな小せえがんさ、よくもかぼちやなどなっている。そばに高え所みた

れば、いがなどがじゃがじゃがある栗の木がいつぺいなっている。こんな大木さ、小せえ実がなっている。こんな地べたの木さ、かぼちやがなっている。なんだ、とてもおかしいと思つただと。なんだ世の木は、地べたなどこんなかぼちやがなっている。かたつぽは、あんな大木さ小せえがなっている。そのかわりいくつもなっているけど。上の方から、いががついた栗が、その人の頭さ落ちたと。

「こんな小せえ栗落ちたからこそ痛くもしなかったが、こんなかぼちや落ちたら、俺頭くらくらつと死んじまう。はあよかった」

とんてんかんてん、とんからりん

長い話

(西方)

ある日なあ、参りに行くべと思つたら、石蔵からへびが

出てきただと。

「あらら、へび出やるの」

見てたれば、そのへびの長えーこと。やあ、一尺出ても、二尺出てもなんぼ、とても明日までも、あさつてまでも長えーこと。

米蔵の中さいナゴがいて、一粒くわえてはまた外さ出で、また食つちまうと家さ入って、それを一俵も二俵も、一年ぐれえかかんべ。

きりもほりもない話

(西方)

あるところに、じいさまとばあさまがいて、じいさまは、げたの緒をたてたつけな。げたの緒をたてるには、きりねえとたてらんね。ばあさまは、針仕事をすべと思つたれば、針がなかつたんだと。きりもほりもねえ話し語んな。

ばか嫁

(西方)

ばかで嫁にいかれない娘がいてやつたと。それが嫁にいかれることになつて、しゅうげん(屁をたれたと)のとき、へたつちやと、そんで困つたと思つてたんだ。

そしたら、そこに気のきいた人がいて、世話する人に、これは、いべつていうたいへんいい屁だつて、嫁にいつて家にいねえでしようねえんで、いるから、いべ、いべつていつていい屁だつて、そしたら感心したんだと。

その娘ばかだから、へたつちや、ほめられつから、

「おら、まだ大きいへたつちや」

といつたと。それでしゅうげん、やめちまつたと。

おならとどろ棒

(西方)

どろぼうが入ったと。寝てる人がなあ、どろぼう来たのはわかんねえんだと。そすと、へつたつちや^(屁をした)。そしたらこんだ、どろぼうがたまげて、盗んべ^とと思つたがやめたんだと。

そんでまた見てつと、誰も眠つていて起きている人がいねえんだと。そんでまた手をかけて盗んべと思うと、へたつちや。

そんでこんだ、どろぼうはなんでかんで欲しくてしようねえんで、見てつと、だーれも起きてる人がいねえんだと。

こんだは大丈夫と思つて荷物つくつたら、そのへつたれ、はしごへたつちやと。ダンジャベ、ダンジャベと屁たつちやと。

そうしたら、どろぼうが荷物置いていったなんて話あるんだと。

まめ三つ

(西方)

あつたどー。

昔、おめえたちみてえな子めらいたどー。

あるとき、外で遊んでいたら、まめ三つ拾つたんだと。そうしたら、うちさ持つてきて、

「おーか、おーか、これでなんか作つてくれろ」
つて言つたら、

「ようし、まめ三つだから、一つは味噌豆にしよう。一つは、じゃがなつとう豆に煮んべえ。さてもう一つは、何にしたらよかんべなあ」

つて、子供も言つたら子供が、

「^(妻こがし)こーせん、こーせん」

「よつし、じゃ、こーせんつくつてくれてみよ。でも、ふるいねえから、こまつたなあ」

つて言つと、

「じゃ、隣のどーどーこのうち行つて借りてくんべえ」

と子供が言うのだ。

「隣のあそこへ行くと、あそこのだれだれが、おらえにも、こうせんほしいからって言われつと、くれねえわけにいかねえ。したから、あそこ、だめだ」

「隣のどことかあんちゃんうちさ行ってこうすと、

「隣のあそこのだれだれあんちゃんちさ行くど、あそこにも、子めらいつぺいいて、おらえにも、こうせんほしいって言うど、くんねえわけにいかねえから、すと、あそこもだめだ」

そして、子供たちの自分の友だちのような家何軒も、こゝろ近所あること、言うわけだす。そうすつとどこへ行っても友だちだから、みな子供だわさ。そうすつと、どこへ行ってもその一つぶのままで作ったこうせんだから、何軒も何軒もやるほどねえわけだ。そんで、

「困ったなあ」

つて子供が言つてつと、

「ああ、いいことがある。うちのおとつあんが、ふんどしは」

「ああ、あのふんどしは、だいぶ古くなつてめもあらくなつてから、んじゃ、ふんどしでこうせんをふるうべえ」

そして、子供と親が話しまとまつて、いよいよふんどしで、そのこうせんをふるおうかと思つたら、おとつあんが、おーきい屁たつちやつたべな。そのこうせんが、ふつとんでいつちまつたんだと。

ざつと昔、さけえもうした。

みょうがの話

(西方)

旅人が、旅館さ泊まつて、その旅館の人さ、欲が深くつて、何か忘れ物してぐといひと思つて、みょうが(みょう

がは物忘れすんだと)お汁にみようが、おかずにみようが、みんな出したんだと。したら、今度、宿賃さ払うの忘れちやって、追っかけるに、

「としのぐるぐる、身の五十、すまの男しよったふるすきさん、行き会わねえかっただんべか」(※)って、人に聞いて一日中追っかけたんだと。

(※)「としは五十くれえで、身はぐるぐるで、すまのふるすきさんしよった男に行き会わなかったか」

金持ちになる方法

(桧原)

「その一」

大きな池があつて、木が生えでて、そしてその木に登つて、

「小指離せー」

ちつて、子供を離す。そんで、

「くすり指離せー。中指離せー」

つて。そしてこうおさえてたら、これ(親指と人指し指)さえ離さないと金持ちになんだって。子供も捨て人情も義理もかかも皆捨てて、この手を離さないつうと、丸だから金持ちになるつて。

「その二」

金持ちになるつて、ひとりの人は、

「おれは梅漬け食べて金持ちになる」つて。したら塩なめた人が負けたんだつて。

いくらかなめれば減るんだつて。梅漬けは種までしゃぶつて、種なめではひろつと出す、なめではひろつと出すして、こんだご飯、食べるにも、梅漬けを思い出すと口からすっかい水(すっぱい)が出っから、そんなにおかすがいらなかったんだ

つて。それで梅漬け食べたんが金持ちになったんだつて。

ばか婿 ④

(滝谷)

ばか婿 ③

(松原)

昔、ばか婿が婿にいつて、遠い山さ行くのに、

「カナカナゼミが鳴いたら帰ってくるんだぞ」

つて、言われちやつて、山さ行ったらすぐに、キヤツキヤツキヤツキヤツつて、カナカナゼミが鳴いたんだつて。

「こりゃあ、もう日暮れだんべ」

と思つて、行くど、すぐに帰つて来たんだつて。そんなばか婿のようだつて。

お茶を飲むときに、あんまり熱いときには、たくわんよ
うけ、かきまぜて飲むと、ほら、たくわんは冷たいでしょ。
だから、かきまぜて飲むと湯がさめつから、そうして飲め
よつて教えられていった。

ちよつとたりないむこさんが、こんど、ふろへはいんべ
と思つたら、あんまり熱くつて、そいでこんど、おふろの
中へ、たくわん持つつて、かきまわして、はいつただよ。

【伝説・手まり唄】

《ここには「伝説」と「手まり唄」等を載せます。「伝説」は、話によっては、一部あるいは全面的に書き換えて、読み易くしたものもあります。》

カシヤ猫の伝説

(入間方)

(一)

昔、山のふもとの大岐（昭和村）という部落に、じいさまとばあさまが二人だけで暮らしていた。あるとき、じいさまは峠を越えて下中津川に用足しに行ったが、夜遅くなってもじいさまはなかなか帰ってこなかった。家では、ばあさまと飼っていた雄のトラ猫だけが、じいさまの帰りを待っていた。

ばあさまはじいさまの帰りがあんまり遅いので、疲れてこくりこくりといねむりをはじめた。そうしたところが、この猫が十才くらいになった古い猫だったので、ばあさまに話しかけた。

「じいさまの帰ってくるのは遅いし、ばあさまと俺ばかりで退屈だなあ」

そうすると、いねむりをしていたばあさまが、

「猫々、何を」

「あんまり退屈だから、なんかおもしろいこととして聞かせっか」

と猫が言った。そしたら、ばあさまが、

「猫、何ができるんだ」

と聞いた。すると猫が、

「俺がこれから浄瑠璃を語って聞かせっから、俺が浄瑠璃を語ったってことを、誰にも他の人には語ってはなんねえぞ」

と口止めをして、ばあさまと約束して浄瑠璃を語った。そ

うしたらところが、猫は浄瑠璃の声もなかなかいいし、ばあさまも今まで眠っていた目もさめてしまつて、いっしうけんめいになつて猫の浄瑠璃を聞いていた。

そうしているうちに、下中津川の方へ買い出しに行つたじいさまが、いつのまにか帰つてきたら、ばあさまと猫だけしかいないはずの家の中があんまりにぎやかだった。そこでじいさまはこっそりと入口の障子を引いたところから中をのぞいて見たが、誰も人影がない。だが、あんまりいい声だったためにじいさまは、

「こりや、確かに俺のいないうちに、ばあさまは浄瑠璃語りをとめておいたに違いねえ」

と思つて、その戸をあけた。戸をあけたら、中では今までにぎやかだったのが、ひっそりと語りがとだえてしまつて、そして中へ入つてみれば誰も人影はない。猫とばあさまだけだった。

そこでじいさまは、

「誰かとめておいたんじゃないか」

とばあさまを責めた。するとばあさまが、

「誰もとまつていない」

「いやとまつていた。今、外で聞いていたら、いい声で浄瑠璃を語つていた。誰かとまつていた」

ばあさまはあんまりじいさまに責められるので、前の猫との約束を忘れたのではないが、

「この猫が語つた」

と言つて、猫の方を指さした。すると目をつぶつて炉端で寝ていた猫が、ばあさまののどにかみついて、ばあさまを殺してしまつた。そこでじいさまは、

「これはとんでもねえ猫だ」

というわけで、あたりの戸を閉めきつて、槍を持ち出して猫を突こうとしたが、猫は裏板でもなんでも飛びあがつて、とうとう障子を破つて逃げ出した。そしてその猫が逃げ出して住みついたのが志津倉山だ。

そして、その猫が志津倉山に住みついてからというもの、この地方では葬式するとき、鏡穢にようはちといつて、かねを鳴ら

しながら墓場まで野辺の送りをするわけだが、行く途中にそれをならしていくと、今まで晴れていた空も曇ってしまい、猫が来てお棺をさらって山へ持っていくという。そのためこの地方では葬式するとき鏡萩をならさずにつそりと野辺の送りをしたという。

(二)

大谷川のほとりに山桜の木が生えており、そのそばに桜橋という橋がかかっていた。

昔、ある人がその桜橋のところまで魚釣りに川を上ってきた。そうしたところ、桜の木の上の方から何か声がかかった。そこで上をひよつと見たら、それこそ一斗樽くらいもありそうなでっかい猫が桜の木の上において、

「魚は釣れたかい」

と言って声をかけた。それを見て今まで釣っていたいわなのびくを投げ出してほうほうのいで逃げ帰った。

(三)

昔、ひでり続きで雨がぜんぜん降らなくなると、志津倉山のすぐ前の雨乞い岩へ、この地方の人が全部集まって雨乞いをやった。

あるときは、この二つばかり向こうの大谷という部落の和尚さんも来て、雨乞い岩でお経をあげたりした。そうしたら、今まで何十日も雨が降らなかったのが、そこで雨乞いをしたために、雨がポトポト降りだし雷も落ちてきた。

昔のことだから、和尚さまは衣のすそを腰にはさんでわらじばきして駆け足で大谷の寺へ逃げこんだ。そうしたら猫が大谷の寺まで追いかけていった。

和尚さまはそれこそ猫に荒らされては大変だというわけで、本堂へ行って灯明をあげてお経をあげた。そうしたら猫は、寺の窓を切ったり、外にある盆栽を奪ったりだいぶ荒らして、また志津倉へもどった。

(四)

弘法大師が高野山を開山する前に、どこがいいかと馬に乗って全国を行脚した。そのおりに、この志津倉山にも立ち寄ったといわれ、志津倉山の雨乞い岩には、そのときのひずめの跡がある。

そうしたところが、ここは大変条件もかかっているのです、ここに寺を開こうかと思っただが、ただ、方向が北向きなのでこれではまずいというわけで、ここをあきらめて高野山に移った。

そのおりに弘法大師が馬に乗ってこのあたりを調べていると、カシャ猫が弘法大師にいたずらをした。ところが弘法大師は普通の凡人ではなくて大変偉い人だったので、カシャ猫は、こしあぶらの杖でしたたか打たれた。そしてお経をやって戒められたから、猫もそれこそ今までの過去を悔いた。弘法大師の前で、

「まったく俺は人のために今まで悪いことばかりして、ほんとうに申しわけありませんでした。これからは罪ほろぼ

しに、しかばねをとって食べません。ひでりにもしません。いいことをやります」

と大きく後悔していい猫になった。

それからというものは、葬式をやるにもひっそり出すこともない。そしてひでりにもならなかった。しかも神通力によってこの地方をやく病やえき病とかそういったものから守ったといわれている。

そして、木を削ってこけしのようなものを作り、それをさわったり持ったりすると子どもが健康に育つという。

また、昭和村の方では今でも、祝い事とかめでたい事があつて歌を出すべきなのに、誰も歌など出さないでひっそりしている宴会を「間方葬式のように」というそうだ。

狗くひん様の空木がえし

(入間方)

天狗というのは、主に季節からいうと、五月の末ごろからだいたい六月の末ころまでの梅雨のころに来たんだな。そのころ山へ行くと、天狗の空木がえしの音を聞くことがある。そういうのを聞く日っていうのは、どういう日かという、あんまり晴れた日はそういう音はしない。曇っていて山に霧のかかったような、そのときは斧で切る音だけがする。パカン、パカんと。木が倒れるときに、メリメリメリと今にも倒れるかと思えるような音がする。音はするんだが、あとバサンと地面についた音までは聞こえない。

天狗の空木がえし

(入間方)

小屋を建ててみんな山へ行つた。
ある夜、五、六人の男たちが山へ行つて火をたいしているとき、いたずらしてほだち（火のついている薪）をぶん投げた。それがおもしろくて、ほだちをぶん投げ、ぶん投げしている、天狗様がおこつて小屋をぐらぐら揺らした。男たちは、
「とてもい（いら）が（れ）なくて、なじょうすんべ」
などと言つてさわいでいる。空木がえしだか、ワリツワリツ、ドタンドタンっていう、くずれるような音がして、とてもおつかなくていられなかった。

鬼子母神の由来

(西方)

昔、ある女がとてたくさん子供を持っていたが、自分の子供ばかりかわいがって、他人の子供はぶつたりはいたり、しまいは殺してしまったりした。お釈迦様がそれを見て、

「そんなことでいいのだろうか」

と、その女の子供を一人隠した。そうすると女は、

「我が子がいなくなった。どこへ行った」

とまるできつねみたいになって捜した。そこでお釈迦様は女にさとした。

「おまえは人の子供は何でもないと考えているけれど、自分の子供一人なくしただけで、それほど泣きわめいて捜しているではないか。とんでもないことだ。私はおまえの心を直したいと思って子供を隠したのだ」

そこで女は考えた。

「なるほどせつなかるう。こうして今まで何人も人の子を

殺してしまつたが、悪かつた。ほんとうにとんでもない罪を犯してしまつた。申しわけない」と反省した。そして鬼子母神という神にまつられた。それが今の西方の鬼子母神だということだ。

幡随院長兵衛と椿の木

(西方)

幡随院長兵衛という人が金をいっばいたためこんだが、盗まれてはならないと夜も眠れなかつた。家の中へ置いておけば悪い者がいるだろうと思って、最後に考えついたのが椿の木の下の深く掘って埋めることだつた。ありつたけの宝物や銭を埋めて安心したと思つたら、翌朝起きてみると椿の花がきれいに咲いて、中には宝物も銭もひとつもなかつた。

とんでんかんでんとかからりん。

弘法様の衣

(西方)

弘法様が村のようすを見るために、托鉢たくはつをして一軒一軒家をまわっていた。

「はあ、何でもそんな関係ねえ」

と言って、何もくれない家もあるし、

「やあやあ、いらっしやい」

と言って、むかえてくれる家もあっているいろいろだった。

そんなおり、弘法様がボロボロの着物を着て、ある家へ立ち寄った。その家では坊様の服があんまり粗末なので、家にも入れず、何もやらないで追いかえしてしまった。

その翌日、弘法様が今度はいい衣を着てその家へ行った。すると、

「こんな立派な和尚様、たいした和尚様だ。こつちの方へ入らっしやい」

と言って、いたれりつくせりのごちそうをした。そうしたら弘法様は出された茶やお吸い物をみんな衣にかけてしま

った。家の者が驚いていると、弘法様は、

「昨日来た乞食和尚は、実は私であったのだ。今日は袈裟衣を着かえてきたために、これだけのごちそうが出た。私はこのごちそうを食うだけの価値はない。この衣が食う価値があるのだ」

と言って、ごちそうをみんな衣にかけてしまったそうだ。

化粧清水

(西方)

昔、弘法様があちこち巡回しているときに、のどがかわいて、そこにあつた清水の水を飲もうとした。そうしたら、いたずら子らがダダッダッと清水に入ってかきまわして泥だらけにしてしまった。弘法様はせっかくきれいな水を飲みたいと思ったのに、泥だらけにされてしまったので、おこつて、

「このやろう、いたずらにもほどがある」

と言うと、しまいにこのやろうが蛙になってしまったということだ。

難船

(西方)

難船していたときに、今にも転覆しそうであった。みんな、

「南無阿弥陀仏。助けてえ」

などと言っていたが、ある少女が、助けてとか南無阿弥陀仏などと言っても死ぬものは死ぬ。どうせ死ぬならばと、甲板に立って思いきり歌を歌った。あらん限りの声をたてて歌った。

西方の柿平というところに、大きなほんとうに谷みたいな所がある。大人の足の跡であるそうだ。大人というのは外国の方から日本に来て、日本をドーンドーンと歩いたそうだ。その跡が大人の足跡だということだ。

おおひと
大人の足跡

(西方)

そうすると向こうに助け船が来た。そのときは、真っ暗な夜だったが、南無阿弥陀仏の声などは聞こえてこないで、歌だけが聞こえてきたそうだ。何十人も人が、この少女のために助けられた。それがどこかにまつられている。

猫の伝説

(西方)

今から三五〇年近く前、四国からここに来た坊様がいた。その坊様は猫を連れてきた。大きな猫だった。猫は人語を話す。この寺が建って一代目から二代目の間、二〇〇年間無住だった。超然と入ってきた坊様が、三年位居て、また帰っていった。これが禅宗の寺の一つの修行だった。

超然と入ってきた四国の坊様がここに来て、猫と暮らしていたとき、猫が言った。

「今ね、この村の庄屋さんの娘が死ぬから、そのとき、俺は松の木の上にお棺を引き上げる。そのとき坊さん、あんたが一生懸命お経を読むとまた降ろすから。きつと村の人たちは、あんたが大した和尚様だっていうわけで、たいへんな物くれるから。二人で魚買って食うべな」
そういう約束をして、二、三日たった。いっぺんにわかにかき曇って雷が鳴る。その雨の中からお棺がずると上った。坊様は、

「このときだ。猫の約束してくれたのは」

と、水晶の数珠をたたきながら、一生懸命お経を読んだ。ところが、猫にとって水晶っていうのは大毒なんだ。水晶数珠をたたいてお経を読んだから、お棺がするする降りてきた。それで、魚や何かを買ってお寺にもどって猫を呼んだら、いくら呼んでもいない。

「どうしたんだろうなあ。」

と思っていると、

「うーん、うーん」

とうなり声がする。

「どうしたんだ」

と言うと、

「あんたが、喜んで水晶の数珠で俺のことぶったから、俺助かんねえ」

「そんなこと言わねえで、魚買ってきたから一緒に食わんべ」

と言ったが、猫は、

「だめだ」

と言って死んでしまった。その坊様は悲しんで、猫を抱いていたが、一週間ぐらいたって、大きな猫がだんだん小さくなって、固くかたまった。それが残されている。

兵六観音

(西方)

昔、観音堂のすぐそばに、兵六というおじいさんが住まっていた。その兵六じいさんは、いつも観音様を信仰していた。西方と柳津の麻生部落で境界あらそいをして、どちらも訴えをおこした。そのとき、兵六じいさんが証人として捕らえられた。らちがあかないので、これを打ち首にするというわけで、縄でしばろうとするが、しばってもしばってもプツンプツンと切れてしまう。

それを見て、何か不思議があるのかもしれないというこ

とで、とき放された。そこで兵六じいさんが、

「打ち首を免れたのは観音様のおかげ」

とお参りに行くと、観音様の肩から胸にかけてスパッと切れた跡があった。それから、その観音様は兵六観音と呼ばれ、信仰もあつく、うやまわれている。

お鈴の壇

(西方)

その昔、戦いのために追われ、逃げてきた姫が矢玉にあたって死んだ。その姫の名は鈴姫という。彼女が死んだ場所が、今の小学校のところだといわれている。その死んだ日は、天気が荒れたさびしい日だったらしい。それで今でもその地域で葬式がある日は天気が必ず荒れるという。

「葬式があつから、お鈴の壇の松に破れ提灯がさがんぞ」と村の人々は言うということだ。

子供の好きな観音様

(西方)

この観音様は、兵六観音の従者、御前立三体で兵六観音を守っている。

子供が夜泣きをすると、この観音様を借りてきて、一緒に床の中へ入れてやると必ず泣かなくなる。泣かなくなると、着物をつくってお礼にお返しをする。また、体の弱い子にもご利益があり、一緒に寝かせると必ず丈夫になる。今でもこれは行われている。

子供が好きな観音様なので、子供が観音堂で遊んでいても決してけがをすることは無い。そこでよくこの辺の人は子供がうるさいと、

「観音様さ行け」

と言う。子供好きな観音様だから、戸を閉めておかれるのが嫌いだといわれている。

手まり唄 ①

(西方)

おぼこおぼこはよいおぼこ
となりのおぼこもよいおぼこ
もめんがっぱで茶のこそで
野にも山にも寝てみたが
松葉にさされて目がさめた
ここはどこよと思たれば
かみがたかい街道のもりの下
もりからつづいてしなのまち
しなのまちから何もろた
でんでんたいこにしようの笛

手まり唄 ②

(桧原)

一番初めは宇都宮
二また日光東照宮
三また佐倉の惣五郎
四また信濃の善光寺
五つは出雲の神社
六つ村々鎮守様
七つ成田の不動様
八つ八幡の八幡宮
九つ高野の金剛様
十は東京ちゅうれんきよ
これより心願かけたなら
ナミコの病いも治るだろう
タケオが戦に行くときは
ナミコは白いハンケチで
雪降りながらのねえあなた

早く帰ってちょうだいね
ゴオゴオゴオと鳴る汽車は
ナミコとタケオの別れ汽車
二度と会われぬ汽車の別
泣いて血を吐くホトトギス

砂玉唄

(桧原)

一列談判破裂して
日露戦争はじまった
さっさと逃げるはロシアの兵
死んでも尽くすは日本の兵
五万の兵を引き連れて
六人残して皆殺し
七月八日の戦いは

ハルピンまでも攻め落とし

クロパトキンの首を取り

東郷大将バーンバンバーンザイ

【民話（朗読テープから）】

《ここに載せる話は、川井地区の長谷川民夫氏が三島町内で採集し、記録しておかれたものです。なお、話は長谷川氏が朗読したものをテープに録音し、それを再び文字に直しました。》

お初と紋次郎

（川井）

むかしむかしのお話ですが、お初と紋次郎の恋物語、そして心中して、その亡霊とかが真夜中、村の中を右往左往して、村人みんなを寒がらせたという昔話を、大造じいさまと千代ばあさまの小さいときに聞いてあったことを思い出して作文にしてみたい。

紋次郎のとなりの家に、お初は子供のころ、子守にたの

まれて来てあつたそうだなあ。お初と紋次郎は、年たつごと
に、二人はよい若者になつたそうだなあ。そして二人は
いつからか、仲の良い、互いに恋し合える仲になつていて
あつたらしいですな。二人はだれにもわからないように、
かくれた恋愛の仲、いつまでも離れないぞという仲の良い
若者であつたらしいのだなあ。

ところでお初は十七、八にもなり、花嫁になる年ごろと
なつたので、村のあるじいが、

「おら家に花嫁に欲しい」

と、お初の実家にたのみ、そして仲人をたのみ、花嫁にも
らうようにしたそうだなあ。そのころ、花嫁、花婿は、本
人よりは両親と仲人との相談で縁談が決まつたそうだから
なあ。深い恋愛の仲、お初と紋次郎は離れたくはなかつた
が、その昔の習慣を知つた二人では、どうすることもでき
なかつたのでしようなあ。

お初は泣く泣く実家にもどり、むりにも、やむなく花嫁
に行くより仕方はなかつたのでしようなあ。二人は離れた

日から苦悶したことでしょうなあ。紋次郎は、その日から
何とかしてお初に会いたいと思つたことと思われるなあ。
お初だつてもあれほどの恋愛の仲、無慈悲にも嫁にやられ
たのだから、快いはずはないと思われるなあ。

お初と紋次郎は、またと会える日を待ちながら、その日、
その日を過ぎたことと察せられるなあ。そして村の上かみと
下しもにいるようなもの、そのうちにいつどこか会うことが
できらしいのだなあ。それもそれこそ、だれにも、おじい
さまにも見つけられまいとして、ふたりはまた、いつか会
うのを楽しみにして別れて、そのあと人目忍んで会つて
いたらしいのだなあ。そして、そのうちにおじいさまに見
つけられ、おじいさまからだれかが聞いたのか、だれとい
うとはなしに、ふたりのことがうわさになつたそうだなあ。
紋次郎は、次男坊であつたそうだがなあ。お初はりっぱ
な嫁ごさま。人目忍んでの出会いも、どこまでも続くわけ
はなかつただろう。紋次郎の家では、さほどでもなかつた
かもしれないが、お初の方では、ほれたはれたのうわさを

聞いたら、何よりか大騒ぎになっただろうと推察します。
お初・紋次郎もこのことが大げさになれば、どうにもならず、そういうしているうちに、お初と紋次郎は、その姿を消してしまったそうだなあ。

お初の家では、

「どこに逃げていったかなあ・・・紋次郎はどうしたかなあ・・・」

近所の人も、親類の人々も、そして村の人々も大騒ぎになっただけの事だ。そして、だれかが大川に心中したのではないかと言う人もいて、それではというので、大川の下の方を捜したそうだな。

そしたら、今の川井新道の下の川の中にある、かみいしという大きな川のところに死体をうめているのをだれかが見つけたそうだなあ。心中が見つかる、ある人は急いで村に来て、みんなに伝えたことでしょうなあ。そして、だれかが心中を引っ張って見たら、ふたりはつながっていてあったそうだなあ。お初はおおむけになんて、紋次郎

はうつぶせになっていて、ひもで二人はしっかりと結ばれていてあったとのことだ。お初と紋次郎は死んでも離れまいとして、ひもで結んだことでしょうなあ。

村の人たちは、お初と紋次郎をどうして運んできたものやら、一人の死人を何人かがかついで来たものやら、だれかがしよって来たものやらなあ。それは大変で、大変であつたであろうなあ。紋次郎の家では、紋次郎を家に入れて、お棺に入れて、あした、和尚さまに来てもらって、親類もみんな集まって、普通の葬式をして、野辺送りをしたとのことです。

お初の家では、

「おら家に嫁に来たものを色男と無理心中をしたのだから・・・」

と言って、お初はなきながら外において、家の中には入れなかったそうだなあ。

その翌日、和尚さまにたのみ、ほうむってもらい、お寺の上の墓場に埋葬したそうだなあ。お初は葬式について、

親類のある人は、

「心中するほど、紋次郎に恋しているのだから、お初を紋次郎のところに埋めてもらったら」

と言う人もあったとかのこと。

「お初は、おらが家の嫁だもの、人の家の墓場になんか埋められるか」

と言って、話にもならなかったとのこと。お初の葬式の日
は、ひどい雨降りで、夜おそくまで降っていてあったとか
のことだなあ。そしてお初の葬式も終わり、親類のある人
が、夜も遅くなって帰り、雨の中を急いでいたら、見える
か見えないかくらいの先を、黒い大きな坊主が先になって
行く姿が見えたそうだなあ。

「はてな、この夜ふけにだれかなあ。またこの大雨振り
に・・・」

と思った瞬間、その坊主は先いったり、そして消えたよう
にわからなくなってしまうたそうだとのことだなあ。

「はてな、今のは何だけな」

その人は、お初のなきがらも紋次郎のなきがらも、思案
しておったとのことだなあ。そのとき、はつと何かをぴん
ときたらしいのだ。そうしたら、背筋がゾツとして頭の
毛が一本ずつ立ったように、足のつま先まで寒けがして、
ザワザワザワザワ、何とも言えることのできないさみしさ
になってあったとのことだなあ。

急いで我が家に帰ろうとしても、足が進まず、でもその
うちに、帰って見たそうだが、寝つかれなかったらしいのだ
なあ。

「あれがお初の魂の亡霊かなあ」
と思つてなあ。そのあと小雨の降る晩とか、しとしとと大
雨の降る夜ふけには、黒い坊主をあの人も見たとか、この
人も見たとか、村では、化け物話にもちきりになったそう
だなあ。

そしてまた、上の方にかすかに何物だかわからない、得
体の知れないものが動いて、フワアツといったとか。下の
方に行くのを見たとか、いやはや大変な騒ぎであったとの

ことだなあ。雨の降る夜ふけの晩などは、水端の家では、真夜中に、ピシヤピシヤピシヤと何物かがわらぞうりをはいて通りを歩くような音がして、それを聞くと寂しくなつて寒けがして、その晩は眠れなかつたとのことだなあ。

お初と紋次郎が心中をして、葬式がすんだその後は、何物だか、だれもが得体のしれないものに、おびえにおびえて、村人みんながどうにもこらえきれずに、お初と紋次郎の親類の人々もお初の家を集まり、

「この化け物騒ぎを何とかしなきゃなるまい」

と相談をしたそうだなあ。あれやこれやお話も様々あつたそうだがなあ。相談の末、お初を墓場より掘りおこして、紋次郎のそばに埋めてやつたらという声も出て、それもなかなかまとまらず、様々なお話の末、

「やつぱりこの世では、結ばれね二人で心中したのだから、二人を集めたら、お初がお寺の上の墓場から、上の墓場へ行ったり、紋次郎がお寺の上の墓場に通わなくなるのでは

ないか」

と、だれかが本気で説得したので、みんなもしぶしぶながら、

「まあまあ、そんなことでもするほかないか」

と言う人もあつて、いよいよお初をお寺の上の墓場より、掘りおこして、上の墓場に運んできて、紋次郎のそばに埋めることに両親、親類、みんなの相談が決まつたそうだなあ。

つぎの日、両方の親類が集まつて、いやいやながらも仕方なく、お寺の上の墓場まで行き、お初を掘りおこして、かついで上の墓場に行き、和尚さまをたのみ、ねんごろに紋次郎のそばに埋葬してくれたとのことすなあ。

その後、だれが雨降りの真夜中を歩いて、黒い坊主とか、得体の知れない何物を見ることができなかつたとのことだなあ。お初と紋次郎はこの世では仲良くできなかつたが、極楽とかで仲良くしていることだろうなあ。村はその後穏やかになつたとのことだなあ。

その昔、お初と紋次郎が心中して、真夜中に村の中を、その魂とか亡霊とかが、あっちこっちに行ったりして、村人を寒がらせた化け物語を、おらあが子供のころ、冬の夜長に赤々と火の燃えている囲炉裏端で、手でしぐさをしながら、何回か、じいさまばあさまに聞いてあったお話を思い出して作文に書いてみた。

ちよつと変わった心中の昔話の実話で、墓場には今なお石塔もはつきり立っています。石塔の右には、「弘化三年八月二十六日 紋次郎」、石塔の左側には、「弘化三年八月十六日 お初」とある。今もなお、お年寄と話をしますと、うすうすながらも、この心中話を語ってくれる人もいます。

ほととぎす

(川井)

昔むかし、あるところでひどい不作が続いて、大変な人

が餓死したそうだなあ。ある家では、ふた親が死んでしまつて、男の兄弟ふたりが生き残つていてあつたそうだなあ。そして、せな(元)の方が体が弱くて寝ていてあつたそうだなあ。さてい(弟)の方は丈夫で、毎日のように近くの山や遠い山に山芋掘りに行つてきて、それを煮て二人で食つていたそうだが、せなには芋のうまいのをくれて、さていはガリガリでした。あつくめ(元)というものの上の細いところを食つていたそうだなあ。

ところで、せなはそのさていに、毎日その度ごとに感謝しなければならぬのだが、利口でなかったらしいせなは、逆にさていに、

「おれには、こんなにもうまい山芋を食わせているのだから、さていはまだまだうまい山芋をうんと食っているにちがいない」

と悪い心をおこし、せなはそのさていの腹の中を見たくなつて、ある晩、さていの寝しずまったのを待つて、包丁でのどを切つて殺してしまい、そしてのどを裂き、腹を裂い

て、腹の中をせなは見たそうだなあ。

ところがどうでしょう、せなの悪い心が思っていたのとまるつきり反対で、さていのども腹の中もあつくめばかりだったそうだなあ。それで利口でなかったせなではあったが、ハツと気がついて、

「さていは自分ではうまくないところを食っていて、おれには芋の良いところのうまいところをくれたのだなあ」

と気がついて、さていにはすまなかったと涙を流し、泣きながら、なきがらにすがりついて、泣いて泣いてとうとう泣き死んでしまったとのことです。

そして、その末、亡霊となってしまって、その亡霊がほととぎすの鳥になって鳴きだして、今も昼も夜も鳴き通して、八千八声鳴かないと何も食うことができないそうで、そしてまた鳴き声も包丁でさていを殺したので、それを泣く度に思い出して、

「ホウチヨウカケタカ、オトウトコイシヤ」

と鳴くのだよと語ってくださり、ほととぎすは限りなく鳴

かなくてはならぬので、口から血を吐き吐き鳴いているので、口の中が真っ赤になっているのだなあ。

そしてまた、ほととぎすは命の限り、八千八声を毎日毎晩鳴かなくてはならぬので、自分の卵を自分の巣で抱いて、子供をかえることができないそうで、よその鳥の巣の中に卵を産み落として育ててもらうのだそうですとのことでした。

また、ほととぎすはじねん(やまいも)じよを思い出して、山芋の芽の出る季節に渡ってくるのだそうです。また、畑の上の長芋もそのころの季節に実がでるようだなあとのことでした。

そしてほととぎすは、その季節に渡ってきて、夜も昼も口から血を吐くほど、

「ホウチヨウカケタカ、オトウトコイシヤ」

と鳴き鳴き、とんで歩かなくてはならぬのだと、九十何歳にもなったばあやは、赤々と火の燃えている囲炉裏端で熱いお茶を飲みながら、ゆっくりゆっくりと語ってくださった昔話です。ばあやは子供のころ、年寄に聞かされたほと

とぎすの昔話のようだが、その昔のばあやも、またその昔のばあやに聞いて語りつがれたほととぎすの昔話のようだ。そして、その昔の世にだれかが、たいした想像力の豊かなおじいさんかおばあさんがいて、ほととぎすの昔話をこしらえてくださったように思われて、ありがたいと感謝しながら書いてみました。

鉄砲ぶちの昔話

(川井)

むかあーし、あるところにきつねやムジナやマミや山鳥、ウサギをとって、じょうずな鉄砲ぶちの若者がいてあったそうだなあ。

ところである冬のこと、なかなかしつこい古きつねがいて、今日はぶってやろうと思って、あのきつねの住む穴のあたりをうまく遠まわりしたり、また姿を見せまいとして、

こつちではうまく古きつねと知恵くらべをして、また今日もきつねに負けて、頭をかしげながら、もっぱら雪の中をかんじきをさげて歩き疲れて、ぼそらぼそらと帰ってくるのであったとのことだなあ。

それで鉄砲ぶちは、古きつねに知恵くらべで負けるので、今度はきつねの歩く林の中に、きつねの好物を置いて、そして、それをいく晩か隠れて、そして毎晩同じところに食い物をおいてきたそうです。

これもやっぱり鉄砲ぶちと古きつねの知恵くらべであったそうだな。さきのころは、いく晩かは鉄砲ぶちのくれたえさを古きつねは、食わなかったそうだなあ。気をつけて通るから、見ていて、それもきつねの足跡でわかるそうでした。

そのうちに古きつねは、好きな焼ねずみを食ったそうだなあ。それも、いく晩か焼ねずみをくれたそうだ。そして、きつねの足跡を見るに、格別不思議がらずに食っていったようであったとのこと。そこで鉄砲ぶちは、おきだめしと

いって、きつねの食ったえさの焼ねずみは、同じ場所において、鉄砲を雪の中にうめこんで、焼ねずみを長い糸でしばり、その長い糸を鉄砲の引き金にしばり、その焼きねずみを食おうとして、口にくわえてヤンコラ引っぱると、引き金がひけて、鉄砲ぶちの火縄に火薬が点火して、鉄砲の玉がツツイノツラとはずれれば、からだにあたるようにしておいたそうだなあ。ところで、古きつねは、火薬の火どめの方とかを知っていたと見えて、每晚鉄砲につけておいた糸をじょうずにとつて、火薬には点火せず、焼きねずみだけ食われてしまう朝が何回かあったそうだなあ。そして、鉄砲ぶちは古きつねとの知恵くらべに負けて、

「もうやめようかなあ」

と思つたらしいのだなあ。そしてある晩、鉄砲ぶちの甚七はどぶろく酒を飲んで夕飯を食って、眠けをさしていたとき、また燭台の松の実の明かりも、とぎれそうになつたとき、だれか入口からうすい声で、

「おばんになりました」

と言つて、戸を少し開けて、鉄砲ぶちの甚七の方を見たそうだ。また、甚七も聞き慣れない声なので、うすぐらいところではあるが、だれかと思つてよく見たら、お寺の和尚さまであつたとのこと。甚七は、

「和尚さま、こんなに遅くどうしました」

と言つたと、いつもだと家に入つて、どぶろく酒を飲んで、長話の和尚さまが、こう言うのだから。そして、和尚さまの姿は、よくくはそのときは見えなかつたわい。そして、和尚さまの話には、

「甚七さんよ、お前は近ごろ、きつねとりに夢中になつてゐるそうだが、きつねとりはやめなさいなあ。甚七さん、それではなあ、また来るよ、早くお休みなさい」

と言つて戸を閉めて、和尚さまは行つてしまつてあつたっけなあ。

そしてまたあとで、感づいたことだが、入るときも出るときも、足を踏む音も、雪を払いのける音もしなかつたっけなあ。そのとき、格別気にもしなかつたけなあ。甚七は

鉄砲のおきだめしのこと、また明日の朝にも、

「あの古きつねめ、焼きねずみを横どりして、食ってしまったておくなべなあ」

と思ひながら寝たそう。そのうちに朝になり、鉄砲ぶちの甚七は、けさも鉄砲のおきだめしのえさの焼きねずみは、きつねに食われたろうと思つたり、もしかして今朝はきつねが死んでいるかと思ひながらも、うす暗いうちに起きて、朝面も洗わないで、かんじきをかけて行つてみたら、おきだめしの鉄砲の先に、きつねが死んでいるのがこつちから見えたので、

「今朝はきつねめ、畜生おれに負けたな」

と思つて急ぎ足で、きつねのところに行つてみたら、いやはやそれはそれは大変なことなつてしまつたが、腰を抜かして、がっかりしてしまつたつけなあ。夕べ来ていた村のお寺の和尚様が死んでいてあつたのでした。

「何でこんなことになつたのかなあ。夕べ、きつねはきつねぶちはやめろと言われてあつたつけかなあ」

と思ひだしたり、

「これでは大変だ。まずはお寺に行つて、おかあさんにあやまらなくてはならない」

と思つて、急ぎ足でお寺に行き、まだうす暗いので、お寺のおつかさんは起きたばかりであつたが、甚七は朝のあいさつもせず、ふるえるような声で、

「おつかさん、おつかさん、おれは大変な事をしてしまつたぞ。和尚さんを殺してしまつたぞ」

と両手をあわさんばかりに、頭をうなだれて玄関でがっかりしていたら、おつかさんは、

「まだ、和尚さんは起きないのよ」

と言つてくれました。和尚様は、早々と玄関で騒ぐ人声があるので起きてきて、甚七の話の聞くと、

「ああ、ああ、そうか、そうか。天道様が出ると、もとのきつねになるから」

と和尚様は笑顔で話してくれたとのこと。です。

甚七は、お寺に和尚様がいたので、おきだめしして鉄砲

でぶち殺した和尚様と両方で、気持ちはどうしてよいやら、何とも言うことがきかない心境になってあったとのことだなあ。お寺の玄関で甚七は、しばしばう然として、何も言わずに仁王立ちなっていてあったと語ったとのこと。

甚七はお寺の玄関にどのくらい立っていたのかなあ。そのうちに我にかえり、和尚さんとおっかさんにどのようなあいさつをしたのだろうか。うす暗かった朝もしつかり昼間の明るさになったので、何だか気味悪い気持ちで、今度はゆっくりゆっくりと、鉄砲でおきだめしをふみとめたところに行ってみたら、あの先ほど見て驚いたお寺の和尚様は、やっぱり和尚様の言う通り、大きな古きつねが死んでいてあったとのこと。そのきつねはしつねを半分ほど白い毛になっていて、長い背も腹も毛が白くなっていて、きつねとりのじょうずな甚七でさえ、大きいきつねは打ったことのないと語ってあったとのことです。

甚七はまたその明日お寺に行き、茶の間に入りこみ、囲炉裏にあたって、おっかさんの出してくれる熱いお茶をこ

ちそうになりながら、和尚さまにしんみりと昨日の朝の出来事をお話しするとともに、この後は、きつねぶちはやめるとお話ししてあったと語ってあったとのことでした。

おおほらふきの昔話

(川井)

むかし、この村に四人のおおほらふきの若者がいてあったそうだなあ。ここでちよつと話は横道にそれますが、雪のうんと深いところから、

一におのかわ 二に 【・・・原本空欄で不明・・・】
三に たかもり しつたらふ

という順に、雪の深さも話題の一つになっていてあったそうだなあ。それで村の比べても、雪の深さになぞらえて、

一に いいちに 二に じさく
三に さいちに 四に たらべえ

と言って、ころはちの名人として、話題になっていてあったそうだなあ。

ところでいいちが夏の暑いときに、ひとりで田の草とりをしていたそうだなあ。そして八つ時^{どき}、今の十時頃そこを通りかかたあるいいちの仲間の若者が、

「おい、いいち、田の草かい。この暑いのに田の草とり大変だなあ。八つ時だ、休んでほらでもふいてみないかい」と言ったら、

「今日はここの田んぼ、みんな田の草をとらなくてはならぬのに、ほらふきの話ではないわい」

と言って、腰をのばして、立ったかと思ったら、いいちは仲間の者に、

「お前は、けさから家に行っていないのか」

と聞いた。そうしたら仲間の者が、

「おれは朝早く家を出かけて、一仕事して、今別のところに行くところだよ」

と言うと、ほらふきいいちは、

「ああ、それではお前はわかるまいが、お前のおかあが腹病みだつて、みんな急いで家に行ったぞ」

と、それもいかにも本当らしい、おつかあの腹病みを聞いて、

「そうか、それでは急いで行ってみつかなあ」

と仲間の者が言ったので、いいちは腹の中で笑いながらも、田の草とりを始まったつけど、仲間の者は、いいちにだまされたとは知らず、家に帰ってみれば、おかあさんもみんなも、

「よいところに来た。今、八つ時に休みにきて、お茶を飲んでいたらところだ」

と言ってあったとのこと。いいちの仲間の者は、

「ほらふきいいちが、田の草をとっていたので、おれが今ごろ八つ時だから休んで、ほらでもふいてみないかと言ったら、今日はほらふきの話ではない。本気で田の草をとらなくてはならぬから、と言っていたが、おかあが腹病みだと、よくもこんなほらをふきやがったなあ」

とみんなにお話をして、

「本当におかあ、腹病みでなくて、よかったわい」

とみんなで笑ったとのことだなあ。

ほらふきの四人は何につけかんにつけ、ときどき大きなほらをふいて、おどろかせたり笑わせたりしていたそう、そのころの人気者であったそうだなあ。たいしたとんちがあつて、利口な若者であつたそうだなあ。

桶背負狐^{おけしよいきつね}

(川井)

むかし、化け狐がいて、桶をしょった姿に化けて人をだますのがとつてもじようずであつたので、みんなはこの化け狐を桶背負狐といっていたそうだなあ。この化け狐のなわばりは、今となつては昔話だが、川井から宮下へ行くのには、川井の上の原を通り、大登から流れてくる小沢にお

りて、また登つて、大登の平に出て、そこを通つて下り道になつたころに六地藏があつて、そこを降りると、やにゆうだになつて、その大登から流れてくる堀の小沢のあたりから六地藏、八木ノ原界限がこの化け狐のなわばりで、そしてこの辺は古い雑木林であつた。秋の木の葉の散るころは、歩くとカサカサ、カサカサして、その昔はうるさいほどであつたことすなあ。

川井の人が宮下へ用足しに行つたり、買い物に行つたり、お祭りに行つて夜になって帰りみやげや魚の買い物を持つてくると、桶背負狐は、待ち伏せをしていて、あの手この手と通りを通る人を、バカにしては持つてきたものをとつては食つていたそうだなあ。それで、この桶背負狐にバカされたところを通るのに、夜は、できるだけさけるようにしていたとのことすなあ。みんなこの地方の人は、化け方のじようずな古狐を、おっかながついていたらしいのだなあ。

そしてある年、日照りが続いて昼間、畑仕事をすると、

はくらん(日射病)になって困った夏があったそうすなあ。ところで、朝五郎おやじは、昼間畑をすると服が焼けつくほど暑いから、朝暗いうちに、大登から流れてくる堀の近くの畑があったので、その畑に行つて、そば伏せといつて、そばをまく畑をしたそうだなあ。

そして、朝五郎のかあさまは赤ん坊をしょつて、後から行くことに話し合ひをしておいたそうだなあ。朝五郎は、この畑に来て本気でそば干しをしていたら、すぐわきの雑木林の中で小さな音がカサツとしたそうだなあ。

そのとき、朝五郎おやじは、まさか桶背負狐ではあるまいとは思つたが、畑を本気でやりながら横目できつねに感づかれないようにして、そつちの方をチラツと見たら、案のごとく本物の古きつねがいてあつたとのことだなあ。

「はて、どんなことをするのかなあ。まさかおれのことを化かすのではあるまいか」

とは思ひながらも畑をやつていて、横目で離さないようにして、古きつねの方を見ていたら、後ろ足だけで立つて、

前足で大きな朴(ほ)の木の葉っぱを拾つて、かたをおこして、背中にパフツとやつたら、みの蓑みのになつてあつたとか。

その次に、二枚目の朴の木の葉っぱを腹をおこして、パフツと背中にやつたら、朝ごはんの入つたくらいの弁当かごになつたとのこと。

次は三枚目の朴の葉っぱを捨ててパフツと頭にあてたら、日照りがさになつたとかなあ。朝五郎おやじは畑をやりながらも、そつちに氣をとられ、本気で見ていたらしいのだなあ。

「はあて、どうすのかなあ。まさか、おれのところに来るのであるまいか」

とは思つたり、来るのかも思つたりして、あの化け狐が来たとしても、おれは化かされてはいられないと思つて、化け狐の方に氣をとられながらも、狐に感づかれまいとして、複雑な氣持ちで畑なえをしていたそうだなあ。

ところが、どうでしょう。その化け狐が、朝五郎のかあさまのお米そつくりそに化けて、朝五郎おやじを前にして、

「おとつあん、今来たぞ」

と言ったので、朝五郎おやじは古狐の化けるところをしつかり見ていたので、

「こんちくしょう。お米にこんなにもよく化けやがったなあ」

とは思っても、感心したところもあったらしいのだ。そのころは、まだうす暗かったらしいのだなあ。お米に化けた古狐、本当に朝五郎が感心したので、

「あーあ、それは大変であったなあ。かごとるから後ろ向け」

と朝五郎おやじは言ったら、化け狐は朝五郎おやじの腹の中もわからないで、後ろを向いたそうだなあ。朝五郎おやじは、

「あの化け狐が、もしおれのところに來たら、畜生め、草刈りで殺してやるから」

と思っていたらしいのだ。

それを本当にお米にそっくりに化けてきて、自分の前で

後ろを向いたのだもの、朝五郎おやじ、そこをすかさず、化けたかごの方は手はいかず、くわの手の方に手がいつて、くわの手をつかむが早いか古狐の頭にいつたのが早いか、朝五郎おやじは力いっぱい、たたきのめしたのことだ。朝五郎の腕に、古狐は負けてたおれて横になってしまったとのことだなあ。

ところが古狐の桶背負狐はお米かあさまに、まあじょうずに化けたので、朝五郎おやじは、狐が化けたのは、そば畑をないながら見ていたが、いざ殺してみたら、

「もしやお米では・・・」

と思ったりして、おかしな気持ちでしりもちをついたりして、動くことも畑をする気持ちにもなれなかったとのことだなあ。

まだ明るくはならなかったが、そのうちに家からお米かあさまが朝五郎おやじと自分の朝ごはんをかごに入れてしよつていたところが、おやじが畑をやらずにしりについて動かず、何か本気で見ていたので、

「今、来たぞ」

とお米かあさまが声をかけたら、おやじはホッと我が氣にかえり、

「お米、ここにきてみる」

と小声で言ったので、

「何かおかしいなあ」

と違って、おやじのところに行ってみたら、大変だ、おれがひとり殺されていたので、お米は大声も出なかったらしいのだ。朝五郎おやじとお米かあさまは向こうとこつちにいて、お話する氣力もなく、朝五郎おやじは、しりもちのまま、しばしばう然としていたらしいのだなあ。

そうして、どのくらいの時がたったのかは、はかりしれぬが、いつか夜があけて、明るくなって、夏の天道様は、赤々と東の山から顔を出したと思ったら、あれほどじょうずにお米かあさまに化けていた桶背負狐も、太い太いしっぽの先から、狐の正体になり、天道様が出てしまうと、もとの古狐になってしまったとのことだなあ。その時はじめ

て、朝五郎おやじもお米かあさまも笑顔になり、

「畜生め、本当にじよずに化けやがったなあ」

と朝五郎おやじは大声も出せず、小声で言ったらしいのだなあ。そうして、古い化け狐の桶背負狐も、みんなのところを化かしていたが、くわっ株一つにやられてしまったとのことだ。

朝五郎おやじは、村一番で、腕つぶしの強い力持ちであったとのことだなあ。その腕でやられたもの、そのあと二人は、くわでできるだけ深く穴を掘ってやり、二人で狐をたがって、南無阿弥陀仏を何回も何回も唱えながらも、静かに穴の中へ入れて、両手を合わせて、極楽へ行くように、拜んでやったとのことだなあ。あれほどの化け狐もくわっ株には負けて、この世の幕をしめたとの昔話ですな。

三島町の民話（話者と題名）

《題名の下に数字は、掲載したページを表します。ページ数が省かれている話は断片的であったり、テープの不備で文字化できず、本誌に載せることができませんでした。なお、括弧内は話者の住居地区名で、昭和五四年七月現在のものです。》

五十嵐ミヨノ（西方）

「瓜子姫」	九
「羽衣」	一一
「信心の話」	一二
「盆花」	一四
「二つまなこの話」	一五
「おっぱの皮」	一七
「ほととぎす」	一七
「むかしの好きな殿様」	一八

「さるむかし①」	一九
「五月の節句の話」	二一
「さるとかに」	二四
「古かめ」	二五
「ばか婿①」	五九
「ばか婿②」	六〇
「利口なよめ」	六〇
「とんてんかんてんとんからりん」	六一
「長い話」	六一
「きりもほりもない話」	六二
「鬼子母神の由来」	七二
「幡随院長兵衛と椿の木」	七二
「弘法様の衣」	七三
「化粧清水」	七三
「大人の足跡」	七四
「難船」	七四
「吾妻のゆわれ」	

「すっぱごの話」	
「股がり大根」	
「鬼退治」	
「金持ちになる方法」	
「天狗の空木がえし」	
五十嵐キヨ (西方)	
「さるむかし」	
遠藤太禪 (西方)	
「猫の伝説」	七五
二瓶なか (西方)	
「みょうがの話」	六四
小柴モト (西方)	
「びわ法師と大蛇」	三七

「へび婿入り」	三七
「かさ地蔵」	三八
「やきめしかぶり」	三九
「兄弟二人と山姥」	四〇
「ばか嫁」	六二
「おならとどろ棒」	六三
「化け猫の話」	
小平のぶ (西方)	
「兵六観音」	七六
「お鈴の壇」	七六
「子供の好きな観音様」	七七
小堀良助 (西方)	
「さるむかし②」	三〇
「だんごむかし」	

小松イセ (西方)

「化け物の話」・・・・・・・・・・二七

「さるむかし」

「侍の話」

五十嵐徳次 (西方)

「鬼むかし」・・・・・・・・・・二八

話者名不明 (西方)

「疫病神」・・・・・・・・・・三二

「だんご殿」・・・・・・・・・・三三

「まめ三つ」・・・・・・・・・・六三

小松テツノ (西方)

「さるむかし」

小松トラヨ (西方)

「花咲爺」・・・・・・・・・・二六

「手まり唄 ①」・・・・・・・・・・七七

「地藏浄土」

佐久間孝一 (早戸)

「猿婿入 ②」・・・・・・・・・・五二

「三枚のお札 ②」・・・・・・・・・・五五

「山姥」

佐藤新一郎 (西方)

「きつねとかわうそ」・・・・・・・・三二

目黒亨 (滝原)

「人喰い神様」・・・・・・・・五〇

「桃太郎」

「さるかに合戦」

話者名不明(滝原)

「猿むかし」

「きつねにばかされた話」

話者名不明(滝谷)

「みそう台」・・・・・・・・・・五〇

「密造酒の話」・・・・・・・・・・五一

「ばか婿④」・・・・・・・・・・六六

長谷川トキワ(桑原)

「桃太郎」・・・・・・・・・・五六

話者不明(桑原)

「猿カニ合戦」・・・・・・・・・・五七

「どうろく神」

杉本ミツイ(桧原)

「猿婿入り①」・・・・・・・・・・四一

「瓜姫」・・・・・・・・・・四三

「三枚のお札①」・・・・・・・・・・四五

「股がり大根」・・・・・・・・・・四七

「食わず女房」・・・・・・・・・・四七

「大男と女の子」・・・・・・・・・・四八

「カワウソとキツネ」・・・・・・・・・・四九

「金持ちになる方法」・・・・・・・・・・六五

「ばか婿③」・・・・・・・・・・六六

「手まり唄②」・・・・・・・・・・七八

「砂玉唄」・・・・・・・・・・七八

「猿かに合戦」

「鬼退治」

「ばか婿」

久保田歌吉（入間方）

「天狗の空木がえし」・・・・・・・・・・七一

久保田耕才（入間方）

「カシヤ猫の伝説」・・・・・・・・・・六七

「狗ひん様の空木がえし」・・・・・・・・七一

長谷川民夫（川井）

「お初と紋次郎」・・・・・・・・・・七九

「ほととぎす」・・・・・・・・・・八四

「鉄砲ぶちの昔話」・・・・・・・・・・八六

「おおほらふきの昔話」・・・・・・・・八九

「桶背負狐」・・・・・・・・・・九一

編集後記

三島町の民話集が出来上がった。この民話集は報告書の資料として位置づけられるが、私たち民話分科会としては、核として考えている。

民話ブームと言われながら、民話を語ってくれる人がどんどん少なくなっている現在において、これだけの民話を聞くことができた私たちは、運が良かったと言えるだろう。それはもちろん、三島町の人たちの協力のおかげで、その真心に報いるという意味でも、この民話集は大切なものだろう。

毎年一回の本調査に臨んで分科会員の中に共通してあるものは、「一話でも多くの民話を聞きたい」ということだろう。そして民話を採集することは、民話分科会の第一の活動と言える。そういう点で、今回の調査は、ほぼ成功と言えるのではないだろうか。

最後になりましたが、民話集を作成するにあたり、三島

町のみなさんに大変お世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。また、民話集の印刷に協力して下さった方々、本当にありがとうございました。

民話分科会名簿（採話調査担当者）

人文学部4年	鈴木久志
教育学部4年	田口静枝
工学部3年	渡辺登志哉
教育学部3年	高橋恵美子
人文学部2年	浜野喜代江
看護学部2年	徳沢方子
教育学部2年	手塚康子
	ほか二名

『ちりりんぽりりんこがねの花』

(福島県大沼郡三島町の民話)

昭和五四年十一月一日発行

発行者 千葉大学日本文化研究会民話分科会

発行所 千葉大学日本文化研究会

リポジトリ公開用覆刻版

『ちりりんぽりりんこがねの花』

(福島県大沼郡三島町の民話)

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧)日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】 二〇一九年九月一日

<https://doi.org/10.20776/106358>